
ぼろり

はち味

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼろり

【Nコード】

N7849S

【作者名】

はち味

【あらすじ】

好みのタイプを訊かれたら、俺は迷わずこう答える。「ランドセルが似合う女の子かな」。キングオブロリコンの主人公 九条高明にはとある秘密があった。変態度99.9%、恋愛度?????の青春ラブコメ。物語の最後には思わず……ぼろり？

ストライクゾーンはひざより下

誰かに好みのタイプを訊かれたら、俺 九条高明は迷わずこう答える。

「ランドセルが似合う女の子かな」

あつ、こいつロリコンだな、と思うことなかれ、判断が早すぎる。

現在の俺は一四歳、明日から中学三年生、今年の夏に一五歳になる。

さて、ここでちょびつと考えてもみよう。

ランドセルを背負う女の子の年齢は、七歳から一二歳の間だ。俺の年齢と比較してみて、それほど差があるかな？ どうか？

一般的に考えても、まだ許容できる誤差の範疇ではなからうか。だから多少は大目に見てくださいよ。ね？

まあね。

さすがに二十歳を超えてもなお小学生が好きな奴はまぎれもなくロリコンだけでも、俺はそんな大人にはなりたくないし、なるつもりもない。

ともあれ。

俺は年下が好きだ。

……いや、少し違うな。言い換えよう。

年上でなければいいのだ。

ある奴に言わせると、「ストライクゾーンがせまいのはもったいねえぞ」とのことらしい。うるせえほつとけと思う。

たしかに現時点では、自分の好みのストライクゾーンはせまい。

しかし、どうだろう。ここで逆転の発想を提示して進ぜよう。

齢を重ねるにつれてストライクゾーンがどんどん広がっていくのだと考えれば、年下好きという性癖は本当にもったいないことなのだろうか。

いや、そうじゃない。

もうおわかりだろう。年下好きであることの特典は、毎年楽しみが増えていくことにある。逆に、年上好きの奴はどうなるのか。言うまでもなく、毎年楽しみが減っていくのである。

どちらが勝ち組か。気づいた者だけが、人生を謳歌できるのだ。

……なんてな。

まあ正直に言つと、これは後づけの言い訳に過ぎない。気がつけば年下が好きで、年上が苦手になっていた。

特に、暴力的な年上の女は大の苦手だ。

俺は昔（と言っても、五、六年くらい前）から、母や姉の暴虐に耐えながら生きてきた。だからなのだろう、年上の女が視界に入るだけで反射的にびびってしまう。

ああ、ちなみに、年上の女と言っても、祖母にはとても優しくされたから、年老いた女性におびえることはない。かと言って、ストライクゾーンには入らない。言うまでもなく。一応ね。

もう一度言おう。

俺は年下の女の子が好きだ。大好きだ。

だから、目の前に可憐な少女が現れたらついつい見惚れてしまうことがある。湯気の立ち上るお茶を一気に飲み干したときようなのが、胸にじわりと広がる。

それは。

駄菓子屋の傍らにある自販機で、緑茶を購入するためにボタンを押そうとしたときのことだった。

月並みな表現で申し訳ないが、俺は本気でこう感じた。

そこに天使が舞い降りたのかと。

天使 それは、小学生の女の子。ランドセルは背負っていないが、ぱつと見てわかる『ランドセル世代』だ。

彼女は店先に向かって駆けてくるや、クーラーボックスの引き戸

を開け、その中に身を乗り出して商品を漁り始めた。白いスカートから伸びた足がバタバタと動く。「うんしょ、うんしょ」と言いながら、必死にアイスを選んでいるらしい。

さて。

俺の脳内にいる審判（52歳／男性／バツイチ）が拳を振り回しながら「ストライク！」と絶叫したんだが、汝はどう思う。この光景の風情みたいなものが、分かる奴にはわかるだろう？

そう、それはまるで眼窩にガラスの粒子が入り込んだかのようで、目の前に広がる世界が輝いて見えるのだ。たとえば少女漫画によくある、白馬の王子様のなキャラクターが登場するときの演出に似ている。

ちゃりん、と小銭の鳴る音がして、俺は我に返った。自販機入れたお金が自動的に返却されたらしい。眼福タイムに浸り過ぎて、すっかりお茶を買うことを忘れていた。

「……いかにいかに」

俺は呟きながら、買いなおすことにした。

がこん。

自販機が荒々しく緑茶を産み落とす。俺は腰を曲げ、ペットボトルを手を取った。

「あの、これくださいー！」

駄菓子屋の中から元気いっぱいの甲高い声が聞こえてきた。いつの間にか少女は店に入っていたらしい。

「支払いはカードで！」

「ぶっ！」

思わず買ったばかりのお茶を地面に落としてしまった。まだキャップを開けていなかったから被害はなかったが。いや、そんなことよりも……。

おいおい、カードって。どこの世間知らずのお嬢なのだろうか。

そもそもこんな田舎の駄菓子屋にカードを読み取る機械はないだろうし、そもそも未成年がカードなんて使えるものなのか。親の承諾があつたらいいのかな。カードの知識がないから、憶測でしか物が言えないけれど。

「そんなもん使えるか！」

老婆のしわがれた怒鳴り声が響く。その後に、「え？ あれ？ そんなはずは……」という戸惑いの声が漏れてくる。まあ、ババアの反応はさもありなんだな。ツツコミ所がありすぎる。

しかし。

可憐な少女の失態に怒声を浴びせるのは法外の所業だ。何があるうとも、少女を傷つけることは俺が許さん。俺が勝手に決めた法律では、俺よりも年下の女性が全面的に優遇される決まりになっている。

したがいするに。

今からババアには天国への近道を教えてやろうと思うわけさ。あ
るいは、地獄への道案内をしてやろうかしら。少女のお望みとあら
ば、俺はいつでもキラーマシーンとなるよ。

「とうっ！」

俺は正義の味方よろしくダサいかけ声とともに、勢いよく駄菓子
屋に乗り込んだ。

「おいバアさんや！」

「……はあ。また妙なのが現れやがった」

駄菓子屋の店主である老婆が、露骨にため息をついて俺を迎えて
くれた。

「何の用じゃい、クソガキ」

これが数百年と接客業をしてきたプロフェッショナルの正しき姿
であるからして、こちらもそれ相応の対応をさせてもらう。

「クソババア、その少女が持つてるカード、あんたのしわでスキヤ
ンできんのか？」

「できるか！」

老婆はしわだらけの顔をさらにしわくちやにして憤る。

「つーか、お前マジで出会いがしらにそれは失礼！」

「そんなにたくさんしわがあるんだから、黒ひげ危機一発みたいな感じでひとつひとつのしわにカードをスライドさせていけばひよつとして……」

「ひよつとするか！ コンピューターおばあちゃんでもできるか、そんなもん！」

憤慨した老婆の顔が、ついにはボツ原稿のような有様になる。やべつ、怒らせすぎたか。

「……というか、ウチの店はカードを読むスキャナーがある」

「え、マジで？ それ必要？」

スキャナーに投資できるほどの利益出てないだろ、この駄菓子屋。

と思いきや、店内を見渡してみると、意外に設備投資していることがわかる。メタリックな外観のアイスクリーム製造機もレジの奥に数台並んでいる。

その内潰れるな、きっと。投資に気合入れ過ぎだ。

「俺、クレジットカードとかに詳しくないけどさ、そういうカードって子どもが使っちゃだめなの？」

「……はん」

鼻で笑う老婆。

「そういう次元の話じゃあないわ。その子の持つてるカードを見てみる」

「え？」

俺は老婆の指さした先にいる少女、その手元を覗き込んで

「……そういうことか」

老婆が声を張り上げたわけを理解した。少女の持ったカードの表面に、魔法少女のイラストが描かれていたからだ。世界広しと言えども、そんなお子様向けなクレジットカードはこの世に存在しないはずだ。

「お父さんもお母さんも、カードでお買い物してたのに……」

少女はくちびるを尖らせてつぶやく。

なるほど。両親が買い物していた光景を見よう見まねでやってみたのだろう。しょせん子どものすることだ。そういう誤解もありえなくもない。

「そういうわけじゃ、お嬢ちゃん」

老婆は少女に向かって優しい声で言った。

「そのカードじゃ買い物はできんよ。ちゃんとお金を持ってこないと」

「……そうですか」

少女はうつむいて、すっかり意気消沈している。とても気の毒である。

「また来ます」

そう言っ て頭を下げた後、とぼとぼと店を出て行こうとする少女。

その悲しみに満ちた背中を目で追っていた俺は、いきなり脇を突かれて「あっ！」と声を上げてしまった。

とっさに脇を見やると、老婆のしなびた指が触れていた。

「何すんだ、このハイテクババア！ ウイルスプログラムをインストールすんぞ！」

「警察にお前をバスターしてもらってから構わんよ。それより、いいのかい？ あの子をこのまま行かせて」

「……うるせえな」

俺は横目で老婆をにらんだ。

「どうせ引き止めたら『このロリコンめ』とか言っ たら？」

「あほうか。妙な心配しおっ てからに……」

老婆はやれやれという風に肩をすくめた。

「わしはそんなことは言わん。早う追いかけて、アイスでもおごつてやれ。そして、店の売り上げに貢献しろ」

「はいはい、大した商売上手なこと」

俺は言いながら小走りで出入り口に向かった。店を出ると、まだ、すぐ近くに少女はたたずんでいた。 好都合だ。

「あの」「はいっ!」

俺が声をかけると、少女はまるで予期していたかのように高速でくるりと振り返った。

「なんでしょう、お兄さん!」

「いや、あの……」

どこか白々しい拳動に思わずたじろいってしまったが、まあかわいから許そう。俺は頭に浮かぶ疑念を振り払いつつ、言葉が続けた。

「君さ、お金持ってないの?」

「一円も持っていません。もし百円あったら、アイスが買えたんですけど」

聞いてもいないのにアイスの話題を振ってくるところも白々しいことこの上ない。だが、それもまた子どもの愛嬌である。何を企んでいようとも、どうしても憎めない。

俺はひざに両手を当てて、少女の目線に自分の目線を合わせた。

「お兄さんが代わりに、アイス買ってあげようか？」

「ええっ、こんなかんた」

そう言いかけて、はっとしたように手で口をふさぐ少女。

「あれ？ こんな簡単、ってどういう意味かな？」

「いえ、何でもないです。それよりいいんですか？ わたし、何もしてないのにアイスを買ってもらって」

「気にしなくていいよ。お兄さんはサンタと同じで、子どもにプレゼントを贈るのが好きなんだ」

「へえー！ お兄さんはすごい人なんですネ！」

少女にきらきらと輝いた目を向けられると、何だか照れる。後頭部がかゆくなる。ぼりぼりしたい。ぼりぼり。

「あはは、そうでもないけどネ。じゃあ、さっきの店に戻ろうか？」

「はい！」

それから店に戻るや、少女と老婆が目を合わせてわずかに口角を持ち上げた気がしたんだが、老婆はともかく、まさか天使に限って姦計をめぐらせるわけがない。ないない。マジでありえない。

俺は頭を振って、再び猜疑の念をリセットしてから、少女に訊ね

た。

「何がほしいの？」

「これです！ バニラ、チョコのミックスで！ ごつつあんです！」

少女が小さな指を向けた先には、アイスクリーム製造機があった。

「まいどあり！ ……このロリコンめ」

老婆が線の多い手の平を俺に向けた。

ミックスは一個、三百円也。

ならば、さっきの百円のくだりは何だったのだろうか。なんて疑問の真相は 露骨にアイコンタクトを交わしている、目の前の二人にしかわからないみたいだ。

優男

だまされちゃいない。だまされちゃいない。だまされちゃいない。

俺は回復の呪文を唱えながら、少女と一緒に店を出た。

少女はとことこ歩きながら、自分の顔くらいの高さのあるアイス
を無邪気になめ回している。

「……まあ、だまされてもいいか」

俺は本心からそう思ってた。そうなのだ。天使の喜ぶ姿
を見られただけでも僥倖と考えよう。三百円くらい安いもんだ。

すると、少女は突然ぴたりと足を止めた。

「お兄さん、今日はありがとうございました！」

快活に感謝の言葉を告げ、ぺこりと一礼した。そのはずみでコーンに乗ったアイスがぐらりと傾き、一瞬落ちそうになったが、
すぐに元の角度に戻った。

……ふう、ひやひやさせる。せっかく買ったものののに、落とされてしまったらショックでヘコむわ。三日三晩、全身斑点だらけの
病状に見舞われて寝込むわ。

「いやいや、どうしたしまして。それじゃあ、俺はもう帰るよ」

「え……もう行っちゃうんですか？」

なぜか名残惜しそうな表情を浮かべる少女。そんな顔を見せられると、ついついこの場にとどまってしまいそうになるが、あいにく今日は外せない用があるのだ。もし無断で外したら、どんな目に遭わされるか、想像もしたくない。

「うん。どうしても外せない用事があるんだ」

「そうですか……」

「またいつか会えるといいね。ばいば」 「おい九条!？」

俺が別れの挨拶を告げている途中、突如、鼓膜をつんざくような大きな声が背後から聞こえた。

「きゃっ!」

目を見開いて驚く少女。その刹那、彼女の手がびくりと動き、アイスが大きく揺れて そのまま地面に引き寄せられるかのように落下した。

べちゃ。

水っぱい音を立てて、コンクリートの上に貼りつくアイス。それはみるみる溶けて、広がっていく。

少女の顔を見ると、目と口を大きく開いたまま固まっていた。しかしやがてその顔も、アイスと同じくみるみる歪み

「……ぐすっ、ぐすっ」

ついには、目から大粒の涙をこぼして泣き出してしまった。

「……あ、あれ、九条？ ひょっとして、おれ、マジイことしたかな？ いや、まさかこんなことになるとは、全然知らなかったし、何の悪意もなかったんだ。それだけは信じてくれな、な？ な？ 謝るから、金なら出すから、ごめん九条。マジごめん。許してくれ！」

動揺に満ち満ちた声が、俺の後ろからマシンガンのように放たれている。だが、何ひとつ鼓膜に当たんねえんだよなあ。

九条高明　　今までの人生で最高潮の怒りを感じておりますゆえに。

俺が今にもはじけそうな感情を抑えながら振り向くと、目の前の男は「ひいっ！」と情けない声を漏らした。

「く、九条さんのそんな顔を見たのは初めてなんだけどいささか怒りすぎではないのか般若よりもキレてらっしゃる」「黙れよ、中瀬古」「ひっ……！」

俺は、滝のような汗をかいている茶髪男　　中瀬古の弁舌を止めた。

「ここで制裁を加えるつもりはねえ。先に”例”の駐車場に行つてそこで待つてろ。いいな？」

「……はい」

中瀬古は声帯を小刻みに震わせながら答えて、そそくさとその場から消えた。

「ぐすつ、お兄さん……」

声と同時に、くいくいと服の裾を引っ張られる感触がして、俺は正気に戻った。

「……せっかく買ってもらったアイス、落としてごめんなさい」

鼻声で謝る少女。鼻を真っ赤にしておえつを漏らす、そんないじらしい姿を見ると、ますます中瀬古に対する怒りが胸にこみ上げる。が、ここはどろどろの感情を抑制して、俺は無理やり笑顔を取り繕った。

「いいいいいよ。落としたのは君のせいじゃないからさ」

俺はポケットから財布を取り出して、一番大きな硬貨をつまむ。

「ほら、これでまた買ってきたよ」

「でも……」

「大丈夫だよ」

言いながら、少女の手に五百円玉を握らせる。

「お兄さん、さっきの男からすべてを奪ってくるからね」

「……はい？」

異常な家庭

少女と別れて、俺は”例”の駐車場に向かう　　ことなく帰宅した。

そうそう。超重大な用事があったのだ。危ない危ない、忘れるところだった。中瀬古には別日に鉄拳制裁を下そうと思う。憶えていたら。

「ただいま」

玄関のドアを開けると、姉が腕を組んで立っていた。

姉は純粋な日本人にもかかわらず、ロングの金髪（染めている）だ。手足はすらりと長く、背後から見ると、まるで外国人のよう。ただし顔立ちはやはり日本人のそれ。身内を評価するのはいささか気恥ずかしいものがあるけど、けっこう美人な姉である。俺とは似ても似つかない。

姉は、にこりと笑って曰く、

「はい、一分遅刻うー」

とのことらしい。

遅刻と言われても、事前に集合時刻を取り決めた記憶はない。昨日、姉本人から「明日は昼過ぎには家にいる」とのご達しがあっただけだ。

現時刻は腕時計の針を見るに午後一時十二分。どうでしょう。姉が『勝手に』決めた集合時刻に間に合わなかったとして、俺は悪いことをしたのだろうか。

いや、何も悪くない。もう一度言っ。何も悪くない。

「ごめんなさい」

しかし、何も悪くなくとも、姉の気分を損ねるようなことがあれば、俺は地に額をつけなければならぬのだ。

なんでっ？ いや、そういうことなんだからしょうがないですよ、としか答えられない。

察してください。死にたくないんです。もう一度言っ。死にたくないんです。

「一分も遅れておいて、謝って済むはずがないよねー？ 中学生にもなってまだママに拭いてもらっているそのお尻、こっちに向けなさい」

「はい」

俺は言われるがまま無駄のない動作で靴を脱いで廊下に入り、いつもウォシュレットで一分以上水浴びさせているお尻を姉に向けた。

ちなみに、母にお尻を拭かれたのは、七年以上前の話だ。

俺の名誉に侵入してくる悪意あるプログラムは逐次、徹底的に潰

していく。

「そんじゃ、ケーツキック……うりゃっ！」

「！？」

どかつ。

俺は前傾姿勢のまま、顔面から壁にぶつかった。お尻に衝撃がはしった瞬間、目前に壁があった。声を出す暇もなかった。

痛い。痛すぎる。鼻が潰れたかもしれない。

「なるほど、思いつきりお尻を蹴られると、人はこういう感じでぶっ飛ぶのね。これで動きのある良い漫画が描けそうだわ」

俺の悲劇的状况に反して、やけにのんきな姉の声。日本のアベレージとされている家庭では、かような一連の暴力的行為はまず起り得ないだろう。

しかし、我が家ではこれが日常なのだ。俺は物心がついたときから、モルモットみたく扱われてきた。

したがって、こんなのは当たり前のことだから俺は別に怒ってない。どいなし。

そう、鼻がずきずきと痛むが、別に怒ってない。再三になるが、別に怒ってない。

「何よ、額に血管の三叉路を浮かべて。文句があるなら、かかって

きなさいな。肉体言語を使って徹底的に議論しましょう」

「……いや、怒ってないよ」

議論と言っても、拳で語り合うのはまっぴらごめんだ。

万に一つも勝ち目がないからな。女性と言えども武道経験者は伊達じゃないのだ。

「あ、そう。相変わらずのフヌケね、中三にもなって。そんなことだから」

見下すように、言葉を吐き捨てる姉。

「まだホワイトチンチンなのよ。その歳でそれだと、ブラックチンチンよりもたちが悪いわ」

「……おいおい、そいつは聞き捨てならんなあ、姉さん」

股間にまつわるエトセトラは、男の尊厳にかかわる部分だ。言わば逆鱗なんだよねえ、そこは。たとえ姉さんがいくら敬うべき存在、力づくでは絶対に勝てない存在だとしても、この件に関しては引いちやいらねえ。

「ふうん。それで、聞き捨てならないとしたら、いったい何なの？」

「しばらく時間をくれ。そうしたら必ず……」

「まさか油性ペンでペイントするんじゃないよね？ もしそんなことしたら、その手の商品を作ってる業者の逆鱗に触れて、最悪の場

合消されるわよ。ちなみにその業界では怖い人のことを『修正ペン』
と言っらしいわよ」

いや、そんな業界用語も慣例もあるわけねえだろ。

「ああ。でも、鉛筆およびシャープンは許可するわ。遠慮なくペイ
ントしてちょうだい」

「手加減を誤ったら、股間がずたずたの血まみれになるけどな」

想像するだけで股間がきゅっとなる。これだから姉は恐ろしい。
口論でも勝てる気がしない。

「ま、あんたの股間のことなんかどうでもいいの。男の乳首くらい
どうでもいいの」

まるで意味が分からない。たしかに男の乳首はどうでもいいとい
うか、存在意義が解せないが。

あれ？

ということとは、俺の股間の存在意義も っておいおい。まさか
一生童貞なんてことはあるまい。あははっ、まさかね。

「ともかく」

姉は言いながら、金色に輝く長い髪を片手で振りはらう。

「さっさと私の部屋に行って作業を始めるわよ。今回こそは絶対に
漫画家としてデビューしてやるんだから！」

ロリコン vs 熟女好き

姉は「漫画家になりたい」という志を持っている。それは立派なことだ。

経済的に自立すれば一人暮らしができるから、なんて高校二年生女子真つ盛りな動機ではあるものの、大きな夢を実現させようと頑張っている姉は、傍から見ていて尊敬する。

姉には漫画家としてデビューし、成功を掴み取ってほしいと思う。だが同時に、成功するための手段として俺を巻き込まないでほしいとも思う。

応援はするが、手伝いはしない。俺はそのくらいのスタンスでいたかった。

しかし、姉はそれを許さなかった。

『少年向けの雑誌に投稿してるんだから、読者にはあんたが適役でしょ』

ということとで、ここのところ連日、素人ながらアドバイザーをさせられている。

「……にしても、何だかなあ」

俺は、羽虫が集うコンビニの前でたたずみ、そうひとりごちた。

アドバイザーの任務だけならまだよかったのだ。漫画を読むのは

好きだから、いくら読んでも苦にならない。ところがそれ以外にも、やれ人が殴られたときのアクションを見たいから実験台になれたの、やれ意見はしてもいいけど私のモチベーションを下げることは言うなだの、難しい注文をつけられるのだ。

さらには、

『ちよつと小腹が空いたからコンビニでおやつ買ってきてくれない？』

と、夜の十時に命令される始末。あの姉は、俺のことを便利な雑用係かそれに近い何かだと思っているに違いない。

まあこうして素直に従っている俺も俺なんだけどな。でも、口答えをしようものなら武術を全力で行使しやがるから、仕方がないじゃない。しょせん弱者は強者の言いなりになるしかないのだ。

「……はあ」

ため息をつくと、両手に持ったビニール袋の重みがいつそう増した。何をやってるんだろうな、俺。

つんつん。

薄茶色の羽ではたく蛾が俺の額に軽く触れて、夜空へと消えていく。……さて、明日から始業式だし、さっさと帰って風呂に入つて早いうちに寝るか。

ぬかるみを歩くような足取りで、数歩進んだときだった。

「あつ、中瀬古先輩！ あれって！」「ああつ！ 九条じゃねーか
っ！ こんなところに！」

十数メートル離れた場所に、二つの人影が見えた。声から察する
に、中瀬古とその後輩か。そういえば中瀬古のことは、昼に起こっ
た事件の後、完全に失念していた。

もしかしてずっと”例”の場所で待ってたのかな。だとすると、
ざまあみろだな。

「おいこら、九条！」

人影二つはダッシュでこちらにやってきた。一人、声を荒げてい
る男は、やはり中瀬古だった。もう一人は知らぬ顔だ。

「お前、何で来なかったんだよ！ 待ちぼうけくらったじゃねーか
！」

「は？ 『待ってる』とは言ったけど、『後で俺も行く』とは言っ
てねーだろ？」

とっさに思い出した。たしか中瀬古には待たせておいただけだっ
た。だから俺は何も謝るようなことはしていない。

「つまりはそういうことだ」

「そういうことじゃねーよ！」

中瀬古は額に血管を浮かべて激怒した。

「こちとら後輩たちに集合かけてずっと待ってたのによお！ おかげで赤っ恥じゃねーか！ 俺の威厳をどうしてくれる！」

「後輩を集めたのはお前の意思だろ。俺は命令してねーよ」

何でもかんでも俺のせいにするな。

「それで、何だ。最後まで残ったのは、その奴だけか」

その奴とは、中瀬古の隣にいる坊主頭の少年のことだ。よく観察してみると、眉毛がない。ここのヤンキーでも珍しいくらい気合が入ってるなあ。頭に脳みそは入ってなさそうだけど。

俺は少年に向かって挨拶をした。

「はじめまして、九条です」

「あつ、どうも。僕は古舘です。こちらこそはじめまして」

「あのさ、いきなりでなんだけど。古舘くん。君、汗かいたら、眼球が痛いでしょ？」

「出会いがしらにそんなリアルな質問?!」

見た目とは裏腹に、少年 古舘とやらがとても礼儀の正しい好青年だったので、つついテンションが上がり、こんな質問をしてしまった俺を誰が責めよう。

古舘は、うわああああ、と顔を真っ赤にして悶絶を始めた。

いきなり急所を突いてしまい、彼には悪いことをしたなと思う。
しかし訊ねずにはいらなかったのだ。涙なしでは語れないである
う、彼の現実を。

なんて、羞恥に悶え苦しむ古館をからかって楽しんでいると、中
瀬古にいきなり胸倉をつかまれた。

「俺の後輩からかうんじゃねーよ。ロリコン野郎め」

「ああん？ お前も人のことを言える性癖か？」

俺もとっさに中瀬古の胸倉をつかみ返して、こう言い返した。

「熟女好きの異常性癖者が偉そうに」

「待てよ九条。熟女好きは犯罪じゃねーけどよお、ロリコンは犯罪
だろ？ その違いは大きいぜ？ ひよこクラブ愛読者め！」

「行為に及ばなきゃ犯罪じゃねーぞ。それよりもあえて腐りかけを
愛好する人間の思考回路が怖いんだけどな。お前らみたいなのが多
少消費期限が切れても大丈夫とか言って、食品偽造すんだよ！」

「うるせえなこの野郎。お子様がランチの変態がよお！」

「お前なんか授業参観の最中、母親たちの振りまくエロスに股間が
自己主張して、作文読むために起立できなかった変態小学生だった
じゃねーか！」

「やんのか！？」「ああん！？」

「ち、ちよつとお二人ともこんなところでケンカするのは……」

「うるせえ！」

古舘が俺と中瀬古の間に割って入ろうとしたが、つい勢い余って一喝してしまった。中瀬古と一緒に。

「……っ!？」

古舘は泣きそうな顔で口をぱくぱくさせた後、絞り出すように「すみません」と言った。冷静になって考えてみたら、こいつは全然悪くないのにな。

そうだ。

悪いのは全部、中瀬古だ。だんだん思い出してきた。中瀬古があのかわいらしい少女を泣せたのだ。だんだん腹が立ってきた。中瀬古にぶち切れた一分のせいで集合時間に遅刻したのだ。おかげで俺は姉からケツキックの制裁を受けた。そのはずみでお尻が二つに割れた。穴も開いてしまった。あまつさえ臭い物体が出るようにもなった。それもこれも。すべて。中瀬古の。中瀬古のせいで、俺は……俺はっ！

「何だ九条、その目つきは」

中瀬古の表情がしだいに険しくなる。

「九条よお、お前、マジで俺とやりあおうってのか？」

「いいぜ。最近は理不尽な目に遭うことが多くてよお、ちようども

シャクシャしてたんだよ」

「ふっ、そうか」

中瀬古は不敵な笑みを浮かべつつ、

「中瀬古太一、十四歳。逃げも隠れもする気はねえ。ケンカならいつでも受けて立つぜ」

なんて、そんなかつこいいセリフで決められちゃあ、こちらとしても、こつ言っしかねえよな。

「なら、今からやろうぜ。」例”の駐車場で。な?」

予感

数十分後、”例”の駐車場に俺たちはいた。

先日潰れたパチンコ屋の裏に位置する駐車場のことを、俺と中瀬古は『例の駐車場』と呼んでいる。

周囲は真っ暗。空が雲に覆われているので月明かりもなく、人里離れたところなので近くに人工的な光もない。可視範囲はおよそ二メートル。自分の目からそれ以上離れた物体は何も見えない。

視覚が制限されると、聴覚が異様に研ぎ澄まされる。風の音、虫の鳴き声、遠くで車の移動する音が、鮮明に耳に届いてくる。

近くでこんな声も聞こえる。

「ギブギブギブギブギブギブギブギブギブギブギブ！」

それは奇妙な虫が鳴いている声ではない。

「痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！」

それは苦痛に満ちた人の声だ。

「マジでごめん！ 謝る！ 俺が悪かった！ 九条！」

それは謝りながら俺の名を呼んでいた。

「どうせなら俺も古館と同じく締め落としてくれよ！ なあ頼むか

ら！」

それはマゾなお願いをしていた。

「アキレス腱固めだけはマジで勘弁してくれ！ 俺のアキレス！
アキレスだけは無事に返してくれ！」

それはアキレスの無事を願っていた。

「太一・アキレス・中瀬古！ ちくしょう、アキレスめ！ 勝手に俺のかかとの付近に寄生しやがって！」

それは突然アキレスにキレ始めた。

「お前を養子にもらった理由は激痛を味わったためじゃなかったんだよ！ この役立たずが！」

それはアキレスに罵声を浴びせていた。

……おっと、状況説明が遅れた。

今、俺は中瀬古のアキレス腱をがちりとホールドしている。アキレス腱固めの状態である。これは寝技アリの格闘技でよく見られるポピュラーな関節技だ。

この技術は、姉の実験道具になっている時代に培ったものじゃなくて、それではあまりにもカッコ悪いので改めて言い直すと、姉との模擬戦闘で培ったサブミッションである。

これで、どうだろう？

関節技の効果は、中瀬古自身の実況で十分に説明がつくと思う。
ギリシア神話に登場する人物 『アキレウス』に八つ当たりして
しまつくらい痛いのだ。

ところで俺たちの様子を傍から見ても、これがケンカの最中だとは
誰も予想だにしないだろう。ケンカと言えば、顔面をド派手に殴り
合う光景を想像するのが一般的だと思う。

だけど、それは俺の理想とする闘い方じゃない。実際、素手で人
の顔を殴ると拳が痛いし、殴られて口の中が切れると鉄をずっと
舐めているような感じになるしさ。現実問題、殴り合いはお互いに
とって損害が多いんだよね。

あと、俺は尾を引くケンカがしたくないのだ。「頬の傷が痛むた
びにあいつの顔を思い出すぜ」みたいな後腐れはなしにしたい。

だからこそその関節技である。

極まれば明確に勝敗がわかるし、実力の差もわかる。打撃とは違
って、相手へのダメージもコントロールできるから、誤って重傷を
負わせることもない。

極めて理性的かつ、クールなケンカ。

それが俺の理想なのだ。いかがだろうか？

「痛い痛い痛い痛い！　なんで力強めてんだよ?!」

「ストレス解消かな？」

「なるほど、アキレスの兄弟みたいなもんだなそいつは！ お前に何かあったのか！？ 話だけなら聞け！」

中瀬古は痛みに苦悶の表情を浮かべながらも、積極的に俺から言葉を引き出すとしている。わけのわからないことを口走っているが、その姿勢だけは大した男である。

「なあ、中瀬古」

「何だよ？」

「年上の女ってうぜえよな……」

「ああ！？ 舐めてんのかこのロリコン！ それだけは言っちゃ痛い痛い痛い痛い！ そうだな！ 俺も年上の女は全員嫌いだよ！ うぜえよ！」

ちょっと痛みを与えればすぐにこれだ。こんな男が俺の通う中学の番長をはっているのだから、事実は小説よりも奇なりだ。こいつを慕っている後輩が不憫でならない。

「だろ？ あいつらは年下の男なんか、男の乳首くらいにしか思っ
てねえんだよ……」

「え、どういう意味それ？ あいつら変態なの？」

中瀬古は混乱している。姉が変態であることは否定しない。

「まあでも、そうだな。年上の男が好きな女は多いよな。逆に、年

下好きは度を越せば変態だ」

「たしかにシヨタコンは変態だな……」

中瀬古の言うことは正論だ。

「わかってるじゃねえか。ついでに言うと、ロリコンも同じだぜ。年下好きは度を越せば変態なん痛い痛い痛い！」

「お前、反省してねえだろ。歩けなくするぞ」「おい」

それは不意のことだった。毅然とした女性の声が俺の語尾についたのだ。さらに続けて、

「お前ら未成年が暗闇で何してんだ？ ホモか？」

と、それはまるで男のような口調なのだが、まぎれもなく女性の声だった。ハスキーで、若干巻き舌な呂律が酔っぱらいのそれに似ていて

ふっと風が吹いた。全身が冷たい空気の渦に包まれる。

その刹那、中瀬古の呆けた顔が月明かりに照らされた。中瀬古は俺の背後に目の焦点を当てながら、

「……すげえ美人だ」

とつぶやいた。

俺はぎくりとした。熟女好き男子の美的観点から査定された美人

というものを想像してみると、嫌な予感しかない。

俺がおそろおそろ振り返ろうとした　そのとき、「今だ!」と
中瀬古が動いた。

中瀬古は俺の腕から片足を引き離して立ち上がるや、

「美人なお姉さん助けてください!　僕と、そこに寝転がっている
後輩が、こいつにいじめられてたんです!」

と大声で虚言を振りまきながら、素早い動きで俺の背後に回った。

ちくしょう!　最悪だ!　形勢が逆転しちゃった!

中瀬古は、俺が年上の女に弱いことを知っている。俺が怖そうな
年上の女を目前にするだけで足が震え、まともに目も合わせられな
くなることも、もちろん。

実際に今も、何もできず立ち尽くしていて

「うるせえ黙れ、てめえ!」

「ぎゃっ!」

背後で、人がコンクリートを転がるような音が聞こえた。

……あれ?　一体、全体、どうなってるの?

「男なら自分でやり返せよ!　意地でも女に頼るんじゃないよ、ク
ズが!」

「ひいつ!？」

中瀬古の発する情けない声と同様、正直俺も混乱していた。背中
の方向から聞こえてくるのはたしかに女性の声なのだが、なぜか頑
固親父のような言葉が飛び出してくる。

改めて言おう。一体、全体、どうなってんの？ わけがわからな
さすぎて怖いよ……。

「クズはさつさとどつかいっちまえ！　そこで寝てる雑魚も連れて
な！　棒立ちしてる奴は、私が成敗してやるからよお！」

「は、はははい！　失礼します！」

中瀬古は俺の横を駆け抜け古館を背負い、「こいつやべえぞ」と
いうアイコンタクトを俺に寄こしてそそくさと逃げて行った。

……いや、アイコンタクトされなくともわかってるよ。わかって
いても、動けねえんだよ。動いたら尿道のコントロールが不能にな
るんだよ。

走り去る足音が遠ざかって、代わりに静寂が訪れた。

「さて」

黒い影が俺のすぐそばを横切った。

「お前らみたいな奴のせいでここの治安が悪くなると、明日から
私の仕事に支障が出るんだよ。わかってんのか、ああ？」

黒髪のロングヘア！

「それによお、せっかくケンカすんなら立ち技で勝負しろよ。見て胸糞悪いわ。寝技なんか今どきオカマでもしねえぞ」

切れ長の大きな目。

「男同士なら顔にキズ作ってなんぼだろ？ これだから近頃のガキは軟弱で嫌いなんだよ。もっと骨のあるやつはいねえのか」

整った顔立ち。

「私らの頃はかなり気合入ってたもんだけどよお。家でゲームするのもいいけど、中防になったらまずケンカだろ？ なあ？」

月明かりを反射する真っ白の肌。

「おいこらお前！ 聞いてんのか……って、あれ？」

年下好きの俺ですら、一生記憶に保存したくなるほどの美人。

「ひょっとして、お前……泣いてんのか？」

そんな人物と対面して、俺は

「うわあああああああああああん！」

俺は、年上の女に怒られている恐怖に堪えられなくなって、盛大に泣き出してしまった。

「お、おい！ どうした？ やば、かわいいっ！ いや、違う！
何なんだお前！」

それから数十分間のことはどうしても思い出せそうにない。

もし思い出したら、立ちどころに脳の海馬を破壊してしまうかも
しないから。

ただし、これだけは言っておこう。

こんな出会いでも、あなたと出会えてよかった、と。

薄幸体

「……行つてきます」

俺は小さな声で言いながら、玄関の引き戸をゆっくりと閉める。
四月の初旬、外はまだ肌寒い。

今年度、初の登校である。なのに、心躍らない。ウキウキしない。
それもこれもすべて、昨夜のできごとのせいだ。

俺は歩きながら　およそ八時間前を思い起こす。

家に戻ってからとんでもない目に遭った。

日付の変わり目から深夜二時に及ぶ説教を食らった。しかも家族
ぐるみで。姉、母、父の順に鉄拳も食らった。

「どうしてこんな遅くまで遊んでいたのか？」

訊かれても、理由が言えない。言えるわけがない。

だって、「年上の女に泣かされて帰宅が遅くなった」なんて口が
裂けても言えないじゃないか。俺にも男としてのメンツがある。い
くら殴られても口を割るわけにはいかない。

おかげで、門限が午後五時になった。

こうなると、部活も途中で抜けないとならない。いっそのこと、

部活はしばらくサボってしまおうと思う。やる気が出るまで。まあ、もともと幽霊部員なのだけれど。

一方で、門限のおかげでお使いに行くことはなくなりそうだが、家にいる時間はすべて漫画の手伝いに拘束される。

よもや中学三年生のスタートがこんな憂鬱なことになってしまうとは思ってもよらなかった。

よって、今の俺は超が付くほどの不機嫌である。朝っぱらから、目に映る森羅万象が憎い。

コンクリートのひびから一所懸命生えているタンポポすら憎い。アウトロー気取ってんじゃねーよ。俺はお前みたいな生き方を認めない。綿毛になる前に潰してやる。

無邪気に笑っている赤ちゃんのポスターすら憎い。何の意味もなく、泣く子も笑う子も黙らしてやるうかしらこんちくしょう。

……いや、違うんです。

本来の俺ならば、『タンポポ』も『赤ちゃん』も愛でる対象にある。なのに、今日に限っては、この体たらくだ。そんな自分にまた嫌気がさす。

「……はあ」

新学年になって早々、疲れた。疲労困憊だ。家から十数分かけて歩く中学校までの道のりがえらく長く感じる。

「よっ、高明！　どうしたの肩落として」

ぽんと背中を叩かれた。振り返ると、見知った女が立っていた。

「窓際に追い込まれたサラリーマンみたいになってるよ？」

「うるせえ。そんなん見たことねえだろ、お前」

「……三年前、退職する前のお父さんみたい」

「お前が肩を落とすなよ。悪かった。ごめん」

出会って早々、気疲れさせられる女だ、こいつは。

彼女の名は、臼井幸子。^{（いすいこうし）}「近所に住んでいる幼馴染だ。幼稚園からの付き合いになる。」

うすいさちこ。さちうすいこ。幸薄い子。

小学六年生の夏、俺が「幸薄い（さちうすい）子」と彼女の名前をもじってからかっていたら、その数か月後、彼女の家庭はその通りになってしまった。臼井家稼ぎ頭のお父さんが会社を辞めたことにより一般的な経済状態の家庭から一転、平成の時代にもかかわらず昭和初期のごとき極貧生活を強いられるようになった。

「九条高明が妙なあだ名でからかったから、私は『薄幸体』になってしまった」

彼女はそんな風に、自分の不幸体質をネタにしているけど、こちら正直笑えない。

彼女に負い目を感じていないと言えば嘘になる。

たとえば、年頃の女の子なのに私服のローテーションが二種類しかないことなんて、他人事ながら悲しくてやるせなくなる。まるで弱小高校の野球部並みの投手不足である。一回戦敗退間違いないだ。

学校指定のジャージでそこらをつろついている姿もよく見かける。彼女は何か食わぬ顔をしているが、気にしていないはずがない。

あまりにも不憫でならないので、何とか彼女に服をプレゼントしようとしたこともあった。

しかし、障害が多すぎて挫折した。世の中には「できること」と「できないこと」の二つがあることを思い知った。

だから俺は

彼女が貧乏であることを認めて、ネタにして、開き直っている。

彼女も「同情されるのがいちばん嫌い」と言っているので、遠慮なく暴言を吐かせてもらっている。

だが、もう一度言う。彼女に負い目がないと言えば嘘になる。

臼井は俺の隣に並んで、空を見上げて言った。

「そう言えば、今年も一緒のクラスだね」

「そうなのか？ クラス替えの張り紙見てねえや。知ってる奴はい

たか？」

「うん。大体は知ってるよ」

臼井は友達が多い。元気で明るくて、気遣いのできる奴だからな。顔もかわいいので男子からの人気も絶大だ。

躁と鬱のギャップが激しいこともあるが、人に嫌われるような要因は少ない。

友達のほとんどいない俺とは大違いだ。

「高明の大好きな、中瀬古もいたよ」

「げっ……」

あいつも同じクラスか。昨日のこと、バレてないといいけどな。場合によっては、どんな手段を使っても口封じをせねば。

「あ、そうだ。今日こそは部活に来るんでしょうね？」

「いや、今日から門限が五時になったから行けそうにないな」

「さらっと下手な嘘つくな。アンタは小学校低学年か」

「これがマジなんだって。夜遊びしてたら怒られたの巻でござる」

「本当？ でも、アンタの家、規則厳しいもんね」

臼井は一瞬首を傾げたが、すぐに納得した。さすが幼馴染だ。理

解が早い。

「しかし、何だっぺいきなり部活のことを訊くんだ？」

「一応、アタシ主将になったし？ 幽霊部員には声をかけないと」

「幽霊部員がいちばん結果を残してるけどな」

これでも昨年、400m走で、県六位の個人成績を残している。
どうだ、すごいだろう？

臼井は「うっ」と唸りながら、絞り出すような声でつぶやいた。

「……アタシもスパイクを買うお金さえあれば」

「さらっと重い嘘つくな。持ってるだろ、臭いのキツイやつ」

たしか先輩のスパイクを譲り受けていたはず。

「臭くないわよ！ ってか、まさかアンタ……嗅いでるの？」

「拷問は国際的に禁止されてるぞ。嗅ぐわけねえだろ」

他人の足の臭いを自らテイ스팅するなんて正気の沙汰じゃない。そういうのが好きな奴は前世でよっぽど悪いことをしたんだろう。

「……でもさあ、実際そういう需要もあるよね」

これは商品になるかも と、臼井はぶつくさ言っている。

「いや、止めとけよ。変態に目をつけられると厄介だぞ」

「変態でも何でもお金を運んでくれるのなら……」

「お前の言動はいちいち心配になるわ！ 変態親父が買っくらいなら俺が買い占めるぞ！」

「はあ？！ やっぱり嗅いでるんじゃないの？」

臼井がドン引きしている。だが、俺は構わない。

金に困った臼井が何かとんでもないことをしでかさないように、俺は色々と苦労しているのだ。自分で言うのもなんだが、本人が気づかない気遣いこそ、真の優しさなのである。

「そうそう」

臼井は肩までまつすぐ伸びた黒髪を触りながら言った。

「春休みに入ってから部活に来なくなったアンタは知らないだろうけど、今日から新しい顧問の先生が来るらしいよ」

「そつか。前の顧問は別の学校に行っちゃったもんな」

ほとんど部活に顔を出す人じゃなかったから、あまり覚えていないが。試合のときだけは世話になったけど。

「噂によるとね、すごい美人なんだってさ」

臼井はいやらしい笑顔を浮かべながら、俺の顔を下からのぞき込むように見る。

「まあ、ロリコンのアンタには関係ないことだろうけど……って、何で変な顔してるの？ そんな顔で生きてて恥ずかしくないの？」

「顔を集中的に狙うのはやめろ。ドッジボールなら反則だぜ。それ以上やるなら先生に言いつけてやるんだからね！」

俺は冗談を言いつつ、内心かなりとまどっていた。「美人」という人物に思い当りがあるからだ。

「何よ、高明」

俺の拳動に怪しいところを感じ取ったのか、臼井は猜疑心に満ちた目をこちらに向けた。

「ひょっとして、そんなに美人教師が気になるの？ ロリコンなのに」

「うるせえ。何度でも言ってやるが、年上には興味ねえよ」

だが、気になってしょうがないのも事実だ。昨日 あんなことがあったからな。

いやいやいやいや。

……まさかな。昨日の女が顧問になるなんて、そんなことは絶対にはいはず。たぶん。

呼び出し

アンビリーバボー。奇跡体験とまでは言わないが、そのまさかだった。

現在、体育館で始業式が行われている。

「今年から赴任することになりました、佐藤ノリオです。体育の教科を担当します。大好物はごはんです。サトウの」

新任、転任してきた教師たちが各々大スベリの挨拶をする最中、昨日の女は檀上のすみで異彩を放っていた。一人だけ醸し出すオーラが違う。ただ黙ってパイプ椅子に座っているだけなのに、それなげだか様になってしまふのだ。

たとえば、「あの人、実は女優なんだぜ」と言われても、何の疑いもなくうなずいてしまうだろう。俺が映画監督なら、彼女がオーディションにやってきた段階で、すでにできあがった脚本を変更してでも彼女を主役に抜擢するだろう。

俺は断じて年上好きじゃないが、個々人の有する魅力はわかる。まあ、いくら魅力があろうとも、トラウマを刺激されるような存在に近づこうとは思わないが。ましてや万が一にも恋愛感情を抱く可能性なんか皆無だ。

「今後ともよろしく願います」

色黒のイケメン体育教師が頭を下げて、周囲から拍手が鳴った。

がたつ。

女がパイプ椅子から立ち上がった途端、拍手がぴたりと鳴りやんだ。体育館にいる全員が、女に注目しているようだ。

「……………」

女はさして他人の目を気にする様子もなく、威風堂々たる足取りで壇上の中央へと移動する。上向きにセットされていたマイクを口元に向けて、「ごほん」と咳払い。

して、曰く

「…………あああああ、あの！ わわ私は、高野香奈です！ よろしくお願いしますっ！」

上ずった声で言いながら、深々とおじぎした。

その後、一秒、二秒……数秒の沈黙を経て

『うおおおおおおおおおおおおおっ！』

『きゃあああああああああああああっ！』

学生たちが爆発的な喚声をあげた。体育館の窓が、びりびりと揺れている。まるで人気歌手のコンサート会場のようなのである。この分だと失神者とか出そうだな。俺も失神しそうだ。ファン（？）の彼らとは別の理由で。

女 高野は口をぽかんと開けて、しきりに周囲をきよろきよろ

と見渡していた。彼女の心境を察するに、

『何が起こったのかわからない』

といったところだろう。断言してもいい。なぜなら俺も同じ心境だから。いやマジで何なのこれ？ どうなってんの？

『こら、静かにしなさい！ 静粛に！ 静粛に！』

それから約一分後、教頭と各教員の懸命な努力によって、喚声がざわめきに变化した。耳に届いてきたざわめきをいくつかピックアップし、俺はようやく状況を正しく理解し始めた。

ざわめきは以下の通りである。

『すげえ美人じゃね？』

『でも、ドジっぽいところがかわいいな』

『俺ファン第一号！』

『……お姉さまと呼びたいわ』

『ボクは佐藤ノリオ先生のごはんになりた』

結論。みんな彼女の魅力にやられてしまったみたいだ。一部、不適切な音声が混じっていたが、気にしないでおこう。禁断（教師と生徒）×禁断（同性）の恋愛には関知しないのが吉。ロクなことがなさそうだ。

「えっと、あの……」

ざわめきの途絶えぬ中、高野は再びマイクに向かっておずおずと喋りだした。

「こ、今年から新卒で採用されました。担当科目は英語です。新米のひよっこです。つたないところも多々ありますが、ぜひとも温かい目で見守っていただければ幸いです」

『美人英語教師サイコー!』

『英語で罵りながら指示棒でバシバシ叩いてください!』

『舐めるような目つきで見守っちゃうよー!』

すがすがしいくらい下品なヤジが飛びかう。昨日の中瀬古みたいにぶっとばされればいいのに。

それにしてもあの女、初対面のとくと雰囲気全然違うな。ガサツで男勝りでヤンキーなイメージがあっただが、それとは正反対の様子だ。もしやネコを被っているのだろうか。……年上の女ならそれもありうる。

「……あはは」

高野はヤジに照れ笑いしながら（猫かぶり）、弱々しい口調で言った。

「さ、最後になりますが、これだけは言わせてください!」

またもや体育館が静寂に包まれる。

「三年三組の九条高明くん」

俺の名前が呼ばれた瞬間、全校生徒の視線がこちらに集中した。数瞬のことなのに殺気すらただよっている。やべえ！ 何か知らんが大ピンチだ！

「大事なお話があるので、放課後、職員室に来てくだ」

途中で声がかき消された。それはなぜかって？

『おらあああああ、クラスメイトになっていきなりだが死ぬよ九条！』

『お前のことは小学生のときから知ってるぞ！ ロリコンで変態でブサイクのくせに！』

『デジマハケダエマオイタツゼスロコ！』

突如、暴徒と化したクラスメイトに揉みくちやにされたからだ。男女関係なく殴る蹴るの暴行を加えてきた。南米の熱狂的なサッカーサポーターでもさすがにここまでではないだろう。

「いやいや俺は無実だ、くっ！ 何もやっていな、がっ！ つーか、何なんだお前ら、ぐふっ！ そのチームワークは、うっ！」

クラスメイトの容赦のない猛攻に抵抗しながら、俺は死に物狂いで弁解していた。が、誰も聞く耳を持たない。こいつらは俺を半殺しにすることだけを考えているみたいだ。ちくしょう！ 八方ふさ

がりだ！

『やめんか君たち！』

『男の人誰か止めてー！』

『いいぞヒジで打て！』

教師たちも必死になって暴れる生徒たちを抑えようとしているが、まるで無力だ。一部、教師にあるまじき肉声も交じっていたが、後日記憶した声質を頼りに人物を特定して、卒業後はお礼参りしてやる。絶対に許すまじ！

なんて、そうこう考えている間にも、

「ぐっ！ ぶっ！ うっ！ うえっ！」

拳、靴底、ヒジのどれかが次々視界に映るようになった。俺の顔面、袋叩きである。リンチと言ってもいいだろう。

はたしてここは教育現場なのか？

そんなことを思った刹那だった。

「……………っ！？」

あごにがつんと強い衝撃を食らって 俺の意識は強制的にシャットダウンされた。

忍々

ふかふかの感触を後頭部に覚えた。はっと目を開けると、明かりの点いていない蛍光灯が見えた。

首をひねって状況を確認する。周囲は白いカーテンに仕切られている。なんとなく状況が飲み込めてきたところで、消毒液っぽい匂いが鼻腔に広がった。

ここは保健室だ。保健室のベッドの上で、しばらく眠っていたらしい。

身体のところどころに痛みを感じるが、頭がやけにすっきりとしている。今朝から続いていた、寝不足による不快感がなくなっているのだ。

ふとベッドの横の棚に置かれていた時計を見ると、三時四十分を示していた。

「……あれ、おかしいな」

俺は見間違いかと思い、ごしごしと目を擦って、もう一度時計を視認した。しかし、やはり時計の針は三時四十分を指している。たしか意識を失くす直前に見た時刻が九時半だったから、およそ六時間も眠っていたことになる。……いや、いくらなんでも眠りすぎだろう、俺。

まあでも気絶させられちゃったししょうがないよね、てな言い訳を心の中で唱えつつ、上半身を起こす。そしてベッドに座る形で、

一時停止。

そう言えば、あの騒動は何が発端となったんだ？

うん。あの女が何かを言ったんだ。えっと、そうだなあ。「大事なお話があるとか」とかなんとか。で、放課後に職員室に来い、みたいなことも

「逃げよう!」

俺はただちに有言を実行に移した。もう放課後じゃないか。悠々とこんなところにいる場合じゃねえ。俺が職員室に赴かずとも、あの女がやってくる。モンスターがやってくる。

昨晚のできごとについて言及されたら、最悪、再起不能にさせられるかもしれない。中学生が深夜に出歩くことは、条例で禁止されているからな。

またもやよからぬ事態に陥るのはごめんだ。人生はゲームオーバーしたらそれで終わり。コンティニューなどない。ゆえに、戦ったら負けるとわかっていいるモンスターへの対処は、逃げるのが最良なのだ。

部屋の出入り口へと猫まっしぐらしている途中、引き戸が自動的に開いた。

「おっ、ようやく起きたか」

そう言いながら、高野が現れた。さて、いきなりラスボスとのエンカウトである。背後に逃げ道はない。終わった。ゲームオーバー

「だ。夜遅くまで中学生が遊んでいた罪を道理として、瞬く間に八つ裂きの刑に処される。」

「目覚めていきなりになるが、ちょっと話がある。その椅子に座ってくれ。いいか？」

「……は、はい」

俺は指示通り、背もたれのない丸型の椅子に腰かけた。高野も、いつも保健室の先生が座っている椅子に尻を置いて、

「なあ、どうしてそんなにおびえてるんだ？ 足が震えてるぞ」

と、訊ねてきた。それはあなたがいろんな意味で怖いからだ、なんて率直な感想は言えず、だったら質問の根源を断つべく足の震えを止めてやろうと、俺は両手でひざを押さえつけてみた。しかし、まるで効果はなかった。ひざは、俺の胸中とは裏腹に大爆笑を続けている。

「まあ無理もないか。昨日は」

高野はすうつと息を吸って、いきなり頭を垂れた。

「昨日はすまなかった。あれは、全面的に私が悪かった」

長い長い髪の毛が、波打つように跳ねた。

「……………」

俺はてっきり夜遊びにふけていたことを怒られるのかと予想し

ていたので、思わず拍子抜けしてしまった。あれれ？ 向こうが謝ってくれちゃってるよ？ ということなの？

「教員としての初勤務を翌日に控え、私はとても緊張していた。その緊張を何とかまぎらわすために、つつい酒をあおりすぎていた」

高野は頭を下げたまま、謝罪を続けた。

「お前が泣き出すまで、私は我を忘れていた。いくら酔っぱらっていたとはいえ、これほどまでにお前を怖がらせるような言動を取ってしまったことについては、本当に申し訳なく思う。また、ケンカの止め方としても、あれは最悪の行動だった。教師にあるまじき拳動だったことを、深く反省している。許してくれなんて言うのは厚かましいが、どうか誤解だけは……いいや、違うな。私が九条に言えることは、これだけだ。本当にごめんなさい」

最後に謝ったきり、高野は微動だにしなくなった。

「……………」

俺は時計が秒針を刻む音を聞きながら、思考をめぐらせていた。はたしてなんと答えたらいいのかと。

このまま黙っていても埒が明かない。こんな状態のまま時間が過ぎ、時計が午後五時を回ったら、この世で最も恐ろしいできごとが我が身に降りかかってしまう。

ならばさっさとこの場を収めて、早々に帰宅しよう。それだ、それがいい。ベストアンサーだ。

俺はなかなか開かない口を無理やりこじ開け、全身全霊を賭して声帯を動かした。めっちゃめっちゃびびってるけど、言うぜ。喋るぜ。年上の女性に話しかけるぜ。

「あ……あの、僕こそ、あんな時間に、あんな場所にいたのが悪かったんです。こここちらこそ、申し訳ないです。だから、どうか、謝らないでくだ」「そうか！」

俺が言い切る前に、高野は素早い動作で顔を上げて、切れ長の目でこちらを睨めつけた。

「なるほど、言われてみればそうだった。だったら先ほどの言葉は撤回させてもらおうか。私が全面的に悪いわけじゃない。ふふふ、そうだ。そうじゃないか。涙を見せられたせいで、つい勘違いをしてしまったんだ」

言葉の後半になるにつれ、声が次第に小さくなってしまったので、正確に聞き取れた自信はない。だが、これだけは自信を持って言える。

答えを間違えた！

ああ、何たる失態。高野の猛省っぷりを鑑みるに、俺はあのまま怒ったふりをして、黙って保健室から出てもよかったんじゃないか。それが正解だったんだよ、きつと。

無駄に勇気を振り絞って、勇気果汁100パーセントにするべきじゃなかった！

ちくしょう、俺ってやつは。何たる間抜け。何たるたわけ。そし

て、いい人。善人。生き地蔵。泣いた赤鬼の親友。

「つーわけでだ」

俺が自己否定から自画自賛のフルコースを満喫しているところに、高野からの差し入れが加わった。

「昨夜の話はなかったことにしよう。それで、構わないな？」

「……………は、はい」

俺は即座にうなずいた。怒られずにすんだのだから、僥倖と言えよう。結果オーライだ。

「……………それにしても」

高野は訝しげな表情で言った。

「昨日も少し思ったんだが、お前はいささか緊張しすぎというか、おびえすぎじゃないか？ 私がそんなに怖いかな？」

「……………」

それを訊かれると、俺はたちどころに何も言えなくなってしまう。

「どうすれば緊張を解いて、まともに会話してくれる。何かアイディアはないのか？」

「……………」

「ゆっくりで良いから答えみてはくれないか？」

高野は優しい語り口で訊ねてきた。まるでそれは、保健室の先生のように。

「何でもいいぞ？ な？」

彼女のスーツ姿が、一瞬だけ白衣に変わったような錯覚に陥りそのせいか俺は、無意識にこんな言葉を紡いでいた。

「……………り、両手両足を縛って、後ろを向いてくだされば」

「変態かお前は」

冷たい返事で、あえなくばっさり切られた。これまたせつかく100%の勇気でアイディアを提案したのにそれが仇となった。ちくしょう。これじゃ俺は、0点のチャンピオンじゃないか。まあ、言う前からわかつちやいたけどさ。

ところが、高野は「やれやれ」とため息をついてから、意外や意外にも、

「わかった。両手両足を縛れはしないが、後ろを向いてやろう。そして、お前には絶対危害を加えないことも約束しよう。これでどうだ？」

そう言いつつ、椅子を反転させて俺に背を向けた。

「ありがとうございます！」

恐怖の対象である年上女性からの視線に解放されたおかげか、俺は水を得た魚のような心持となり、すぐさま感謝の辞を述べた。いやはや、うるおいがあるって、いいよね。

「……ちえ、よどみなく答えやがって。そんなに怖がらなくてもいいじゃねえか」

俺とは対照的に、高野は肩をがくんと落としていた。まあ我のことながら、こんな露骨な拒否反応を示したら誰だって落ち込むよな。今まで出会ってきた年上女性もみんなそうだった。でも、しょうがないんだよ。俺にはどうすることもできない。

ただ、あれだ。後ろを向いてくれた代わりと言っちゃあなんだが、こちらにも真摯な対応をすることを約束しよう。腹を割って会話する。心の中で、そう誓う。

「ところで九条。お前に聞きたいことがある。昨日、お前と一緒にいた中瀬古のことだ」

「何でしょうか？」

「お前らの個人情報とは三年三組の副担任として、ある程度把握させてもらった。だから、私がお前らの顔と名前を知っているわけなんだが、まあそれはどうでもいいとして。中瀬古は今年の一月頃からほとんど学校に来ていない。そして、今日も出席していない。この原因について、何かお前は知らないか？」

「いえ、存じておりません」

これはマジだ。あいつが何を考えて登校を拒否しているのか、あ

るいはあいつが学校にいない間に何をやっているのかなんて、俺はまったく知らない。興味もない。

「そうか。なら、質問を変えよう。あいつが普段、どこで何をしているのかも知らないか？ 町でよく見かけたりすることもないか？」

「近場のゲームセンターにいたりとか、コンビニにいたりとか、そんなところでしょうか。中学生の遊び場所なんて、大体そんなもんですよ」

「なるほどな」

高野は嬉しそうな声を漏らした

「ふむ。しかし、私はこの町に来てあまり日が長くなってな。正直、右も左もわからん。だから、町を案内してくれる人を探しているのだが……」

「はい」と俺は相槌を打った。

「九条、これも何かの縁だ、本日、町案内を頼まれてくれないか。もちろんタダでは言わない。あまりおおっぴらに公言することは憚られるが、飯を奢ることを条件に依頼したい。どうだろう？」

「ごめんなさい。僕はどうしても都合が悪いんです」

「そうか。それなら明日にでも」「いいえ」

俺は毅然と言い放った。

「明日も、明後日も、きつとこれかも平日の放課後はダメですね」

高野は数拍の間を開けたのち、平坦な声でこう言った。

「……私が怖いからか？」

「いや……そりゃ怖いのは怖いですけど、それとはまた別の理由があるんです」

「ふむ」と高野。

「この際なので誤解がないように言っておくと、門限があるんです」

「それは何時なんだ？」

「午後五時です」

「おい待て、嘘をつくなよ。私は見え透いた嘘が大嫌いだ」

高野の声に怒気の色を帯びる。しかし、これは事実なのだから、俺はひるまない。俺も、見え透いた嘘は嫌いだ。誰もが嫌な気分にならない嘘は好きだが。

「嘘じゃないです」

「しかし、昨日、お前を見かけたのは十一時過ぎだったぞ」

「あいにくながら、昨日のおかげでそうなってしまったんです。家に帰るのが遅れて、怒られました。また、その事情をうまく説明できなかったので……やっぱり恥ずかしいじゃないですか、女性に泣

かされて遅れたなんて」

これも事実だ。高野に文句を言うつもりはなかったが、事実は事実。そのまま伝えるのがせめてもの誠意ってもんだ。

「たしかに、女に泣かされた、とは言えないか。本当、申し訳ない」

高野はバツの悪そうな顔をした。

「一般に公務員の勤務終了時間は、午後五時以後でしょう」

「うん。私の場合は、お前の門限と同時刻だ」

「つまりは　そういうことなんです。申し訳ありませんが」

「ふうん。……だったら、そうだなあ」

高野は背もたれに身を委ねて、椅子を軋ませながら、

「じゃあ今日のところは予定変更だ。お前の家に連れて行け」

「え？　　どういうことですか？」

「ご家族に昨日のできごとを説明して、誤解を解いてもらう。もちろん、お前が泣いていたことは、伏せるつもりだ。お前も、このまま門限が午後五時になると困るだろう？」

「まあ、そうですが……」

ウチの家族を簡単に説得できるとも思えないが、門限の交渉に立

ち会ってくれるのならありがたい。願ってもないチャンスだ。

「なら、決まりだな。さてさて、午後五時までは部活の時間だ」

高野は椅子をくるりと回して、こちらを向いた。……思えば、部活の存在を完全に失念していた。彼女は新任の教師で、それでいて

「今日から私は、陸上部顧問としても頑張るぜ。まずは手始めに、幽霊部員の門限をこじ開けるところからな。ふふ」

「……………はい」

りくぶっ！

「これから、私は猫をかぶる」

保健室から校庭に移動している途中だった。校舎から青空の下に出た途端、いきなり高野は立ち止まり、ぽつりとそんなことを言った。

「お前と中瀬古以外の連中の前では、素の自分を隠すつもりでいる」
俺が「どうしてなのですか」と質問する前に、高野は言葉を続けた。

「ありのままの私を見せると、たいていの人怖がるのだ。私みたいながさつでぶっきらぼうな女よりも、おしとやかで柔らかいイメージの女の方が、人から受け入れられやすそうだろ」

たしかに、と俺は心の中で同意した。

「……いやはや、あんな辛い体験は教育実習のときだけで充分だ。時代錯誤なリーゼント高校生たちが己のプライドを曲げて七三分けに」

ぶつぶつと独り言のように喋るので後半の部分があまり聞き取れなかったが、高野はえらく波乱万丈な教育実習を過ごしたらしい。

なのに、どうして教師になろうと思ったのだろうか。

機会があれば、いつか訊いてみたい。

「まあ、なんだ」

高野は大きく息を吸って、大きく息を吐いた。

「これは、私の弱みと思ってもらってかまわない」

どうしてそんなことを言うのですか、と訊ねようとする前に、またしても高野の言葉に遮られた。

「弱みを握られていた方が、お前が私と対等に付き合ってくれそうだしな」

高野は小悪魔のような笑顔を浮かべながら俺を見て　しかし、すぐに平然とした顔つきになった。

「何か言いたそうだな？」

「……はい。そんな風に言えることが弱みだとは思えません」

俺が正直な感想を述べると、高野は小さく鼻で笑った。

「そうでもないぞ。本当、人から怖がられるのは嫌なもんだよ。別に善人ぶるわけじゃないが、『泣いた赤鬼』の赤鬼の気持ちかわかるんだ、私は。昔から　そうだったからな。じゃあ、行くぞ」

高野はそう言って、再び歩き出した。その後ろを追いながら、俺は彼女の言葉を反芻していた。

しかし、まるで納得できなかった。

彼女が人から怖がられていた要因が、はたして言動によるものだけだったのだろうか。疑問だ。見た目は気後れするのほど美人だが怖くはないし、口調も男よりも男っぽいが怖くはない。俺が彼女を恐れている理由は、単に彼女が俺より年上の女性だからだ。猫をかぶっているようがかぶっていまいが、関係ない。

そのところを勘違いされちゃあ困るので、この際年上の女性が苦手であることをぶっちゃけてしまおうかどうか、なんて悩んでいたが、すぐに校庭にたどり着いてしまい、俺はいったん思考を中断した。

校庭は縦、横400mくらいの広さがあり、その中心には一周200mのトラックがある。グラウンドで活動を行っているクラブは、陸上部のほかに、野球部、ソフトボール部しかなく、それぞれが均等に三分の一ずつの面積を使用している。

今日は野球部、ソフトボール部ともに活動していないらしく、校庭は閑散としている。ということで、トラックの周りをだらだらと走っているのはもれなく陸上部の連中だ。

砂交じりの冷やかな風が顔に当たる。俺は目をつむって、風が収まるまでじっとしていた。

「なあ、九条」とすぐ隣から名前を呼ばれた。

「どうされました？」

答えながら目を開いて隣を見ると、高野は手の甲で目をこすっていた。

「ごめん。ちょっと待ってくれ」

どうやら砂が目に入っただけ。始業式の時と言い、案外間抜けだ。

「……よし、もう大丈夫だ。さて、改めて。なあ、九条」

「どうされました？」

「陸上部の部員数は、計九人だったはずだよな？」

「そうですよ」

「しかし、校庭には、お前も含めて四人しかいないじゃないか」

高野の言うとおりだ。女子二人と男子一人、そして俺を含めた四人しか存在しない。

「陸上部でまじめに活動しているのは、そこにいる三人だけです。他は幽霊部員です」

「……そうなのか。前顧問の方からは、お前だけが幽霊部員だと聞かされていたんだが」

高野は確認するように言いながら、親指と人差し指であごをつまんだ。

彼女の言葉から推測するに、俺は練習にはほとんど顔を出さなかったが、いちおう試合には出ていたし、かつ結果も出していたので、前顧問の記憶に残っていたのだろう。つーことは、他の部員は完全

に記憶から消されてるのか。ひでえ顧問と、ひでえ部員だ。まあどつちもどつちだけど。

「もしかして、がっかりされましたか？」

訊ねると、高野はぴくつと頬を動かしてこちらを向いた。

「……いいや。やることは同じだな。うん、そうだ」

自分の言葉に納得するように、高野は二度うなずいた。

「教えてくれてありがとう、九条」

「……い、いや、れ、礼には、及びませんよ」

高野があまりにも綺麗な笑顔を見せるので、俺は返事に戸惑ってしまった。彼女には、年上の女性に抱く『怖れの感情』とは別の理由で緊張する。

そついや、いつの間にか『怖れの感情』はほとんどなくなっていた。ほんの短い時間だけれど、これほど自然に年上の女性と会話できたのは何年ぶりだろうか。

などと感慨にふけていた矢先のことだった。

「お前の言葉で決心がついたよ」

高野が意味深な言葉を呟いて、一步、一步と校庭の土を踏みしめた。

「あ、高野先生だ！」「隣に九条もいる！」

遠くにいる二人の女子が俺たちの存在に気がついたらしく、やや興奮気味に騒いでいる。その一方、残る一人の男子はこちらを見向きもせず、黙々とジョギングを続けている。

高野は両手でメガホンの形を作り、それを口元にあてて叫んだ。

「おい、陸上部のみんなー！ 挨拶するからこっちにきてー！」

思わず笑ってしまうところだった。なぜなら高野の発した声が、幼児向けテレビ番組のお姉さんのような添加物まみれの声だったからだ。素の状態とのギャップがあまりにもひどい。まるで『力二カマ』レベルの加工っぷりだ。説明書きがなければ原材料が確実にわからない。

女子二人は駆け足で、男子一人はジョギングのペースのままこちらにやってきた。これにて陸上部、全員集合である。

女子の二人。一人は、臼井幸子である。陸上部主将。まじめで謙虚な優等生だ。

もう一人は、ポニーテールが特徴的な鶴本茜音だ。つるもとあかね彼女は俺好みの小柄な体格をしていて、臼井に引けを取らないくらいの可愛らしい顔をしている。性格は素直で人当たりもよい。つまり、超俺好みである。

ところが、まっこと恨めしいことに、彼女は彼氏持ちだ。本人いわく、「高校生の彼なの」とのこと。

その事実を知った瞬間から、俺は陸上競技で頑張ることを辞めた。

そう。実はそういうことなのだ。俺の心のかさぶたを剥がすと、彼女への思いの深さが垣間見えるかもしれない。

……さて、気を取り直して。

男子は一人。名を谷垣元春^{たにがきもと}という。彼は俺の後輩にあたる。無口でクール。最近の流行り言葉で言うと、いわゆるイケメンというやつだ。なおかつ高身長で学業も優秀。一見、非の打ちどころのない完璧人間のように見える。

しかし、彼には一つだけ致命的な欠点がある。

それは 体毛が濃すぎることだ。首から下の体毛がハンパではない。その見た目から、俺は彼のことを「実は四足歩行」というニツクネームで呼んでいる（心の中で）。だって、どこからどう見ても知能の高い動物のそれとは思えないからだ。

よく言えば、ワイルド。悪く言えば、初期人類。

これ以上は悪口になるので、彼の紹介はここらで終わっておく。

「これでみんな、集まってくれたね」

高野は満面の笑みで部員たちの顔を見回した。

「それではさっそくミーティングを始める 前に、自己紹介をします。今日から陸上部の顧問を務めます、高野です。陸上競技の経験はないけど、これから精一杯専門的な知識をつけて、みんなと一

緒に頑張っていこうと思います。よろしくお願いします」

言い終えて高野が頭を下げると、女子二人が勢いよく拍手を鳴らした。少し遅れて、俺もそれに続いた。谷垣は微動だにしなかった。

「ありがとう、みんな。それじゃあ、ミーティングを始めますね」

顔を上げた高野は、ぴくぴくとニヤついている唇を真一文字に結び、白々しくごほんの一つ咳をした。

「いきなりだけど、みんなに課題を出したいと思います。その内容は、難しい人には難しく、簡単な人には簡単なものです。そのテーマは――」

高野の目つきが一瞬するどくなった。が、すぐに丸みを帯びた状態に戻った。

「陸上競技を行う目的です。目的の内容はそれぞれ異なりますから、内容は自由です。目的を紙に書いて、私に提出してください。紙はどんなものでも構いません」

「はいはい、高野先生質問です！」

小柄な身体を大きく動かして、鶴本は手を挙げた。

「提出期限はいつですかー？」

「いい質問ですね。提出期限は設けません。目的が見つかり、その目的を私に教えたくなったら提出してくださいね」

「はいはい、わかりましたー！」

美女と美少女が互いに微笑み合う。今すぐにでも願いが叶うならば、一眼レフで撮影して、永久保存したい光景だ。

「……あの、俺も質問していいですか？」

珍しく谷垣が声を出した。

「どうぞ」と高野が先を促すと、谷垣は宙に視線を泳がせた後、再び口を開いた。

「どうして『目標』じゃなくて『目的』なんですか？」

これまた珍しい、どこかいらだっているような、反抗的な声色だった。いつもは声に感情を出さない彼なのに、突然どうしたのだろうか。

「よく気がつきましたね、谷垣くん」

高野は、さつき鶴本に見せた笑顔とは違う、小悪魔的な笑顔を浮かべた。

「まあ特に深い意味はありませんけどね。今後いつか目標を訊ねることもあるでしょうし」

谷垣は数拍の間を置いてから、「そうですか」と言った。いつもの冷淡な声色だった。

「他に質問はないですか？」

高野が言いながら、臼井と俺に目を向けてきた。

「ありません」「ありません」

偶然にも臼井と返事が重なった。

それがおかしかったのか、高野は「大きな蛾がやってきそう」とくすりと笑った。いやいや。モスラが呼べるほどの、美しいハーモニーではなかったのだけれど。

「わかりました。ミーティングは以上です。では、今日は君たちのふだんの練習風景を見学させてもらいます。各自、準備を終えたら、練習に取り掛かってください」

発音がイイネ！

部活の途中で、高野が校長に呼び出しをくらった。

「もし練習が終わるまでに私が間に合わなかったら先に帰宅してくれ。要件が済んだらすぐに向かう」

彼女はそう言い残して、その場を後にした。そして結局、彼女は練習が終わっても校庭には現れなかった。

そんな経緯を経て、俺は臼井と一緒に下校している。練習着（ジャージ姿）のままのこいつと並んで帰るのは久々だ。

「ねえ、高明」と臼井が切り出した。

「アタシ、アンタが年上の女の人とともに会話してるの初めて見たかも」

「あー、そうだな」

ミーティング後。練習が始まったものの、俺は練習着を持っていなかったなので、高野と喋りながら見学をしていたのだ。

ちなみにこれは余談になるが、高野は陸上競技の知識はほぼゼロに等しいようで、しきりにあれこれと訊いてきた。

こんな調子で顧問が務まるのかと俺は一時心配に思ったが、指導者としての熱意が十二分に伝わるほどの質問攻めに遭い、すべての質問に答え終わる頃には、それが杞憂だったと思い直した。

「ただ、まだ目を見て話すのは無理だけどな。……怖いし」

「怖い？」

そうかなー、と臼井は首を傾げる。

「ていうか、なんでアンタは年上の女の人が苦手なんだっけ？」

「わかんね。気がついたらそうなってた感じだ」

これは真っ赤な嘘だ。間違いなく母と姉の影響であることは断言できる。だが、身内のことを悪く言うのは俺のポリシーに反するから、嘘でごまかしておく。

そんな俺の心情を知ってか知らずか、臼井は納得できないような語調で、「ふーん」と言うのだった。

なので

「まあ、あれだよ。感情なんて大体そんなもんだろ？」

俺はさらに言い訳を重ねて、彼女の気を別の方向に逸らそうとたくらんだ。

「たとえば恋だって同じさ。気がついたらそうなってるんだ」

まあこんな風に、かっこよく決めて見た次第であるが、いかがかな？ マドモアゼル？

「アンタが言つと見事に気持ち悪いね」

うむ。臼井の気持ちを『疑い』から『嫌悪』に変えることには成功したが、その副作用として、言葉の猛毒を浴びせられた。

「あまりに気持ち悪くて吐きそうになるよ。胃の中のものだけじゃなく腸の中のものまで全部」

「お前の発言の方が気持ち悪いわ」

腸の中のものって、無修正で言つと、ウンコじゃねえか。もうすぐゴールだつてのに、わざわざ引き返してくんなよ。ウンコ。

「そりゃアンタがこんなにも気持ち悪いんだから、さすがのウンコも動揺してコースを間違えちゃうよ」

「いやいや、胃から上部はウンコ進入禁止になつてるだろ！ 食道より上に出たら大惨事になるぞ！」

「進入禁止？」

不意に臼井は冷笑を浮かべる。

「アンタは考えが甘いね。ウンコがいつも道路交通法を遵守するとは限らないでしょ？ ましてやアンタがこんなにも気持ち悪いんだから」

「オーケー、わかった。ウンコさんの気分を害して悪かった。謝る。陳謝するよ。すまなかった」

「わかればいいんだよ。それと、これも誓いなさいな。これから先、ウンコを保有する生き物の前で愛だの恋だのと言っちゃだめ」

「了解した。金輪際、恋愛に関する発言はしない。ウンコに誓って」

「ついでに紙にも誓っておけば？ 今回の一件の尻拭いをしてくれるかもしれないし」

「なるほど、それは名案だ」

このやりとりにならぬ笑い声が付いていたら海外ドラマだ。俺と臼井は、小学生のときから、こんな『ごっこ』遊びをすることがある。

「ごっこを極めると、ドラマになるんだろうけどな。しかし、アドリブでは、そこまでのハイクオリティーな演技はできない。まあせいぜい、俺たちの間だけで楽しんでやることで手一杯だ。」

「まあいいや」と、臼井は仕切りなおすように言う。

「それよりさ、あの課題ってどう思う？」

「ああ、陸上競技を行う目的ってやつな。俺にとっては簡単な課題だ」

臼井は、「へえ」と意外そうにする。

「ちなみに、アンタの目的は何なの？」

「そら 女にモテるためだ」

足が速い野郎はモテる。俺は、どこからか耳にしたその神話を頑なに信じて、陸上部に入部した。

練習を重ねるにつれて、足はどんどん速くなった。中学二年のときの運動会では、同学年で一番足が速かった（短距離も長距離も）。本種目の400mでは、市内の大会でも優勝するようになった。

「実際のところは、どうなの？」

「うるせえ！ 知ってるくせに！」

結論から言うと、まったくモテなかった。「先輩、このタオル使ってください！」みたいなことは、一度たりともなかった。神話はいや、ただのデマに過ぎなかった。

「じゃあアンタ、今は完全に目的を見失ってるじゃん」

「……そうだよ。だから俺は練習に出ないんだよ」

また新たな目的が見つければ、練習に出るかもしれない。ただ、あと数ヶ月もすれば、引退の時期がやってくる。それまで、怠惰な日常を送るのも悪くない。楽だし。どうせ頑張ってもモテないし。

「……なるほどね。この課題の狙いはそういうところにあるのかも」

臼井がぶつくさと小声でひとりごとを言っている。

「つーか、そういうお前はどつなんだよ？」

「え、アタシッ!？」

なぜかびっくりしたように目を丸くする臼井。会話の流れとしては極々自然だったと思うんだけど。

「……アタシは、そうね。アンタとは違って、高尚な目的があるよ」「つまり？」

「こ、高尚な……目的が……あるはずよ」

「お前も見つかってねえじゃねーか」

陸上部主将のクセによお。大丈夫か、陸上部。

「主将だから高い目的があって当然、なような気がすんの! つーか、モテるためにやってるとか単純すぎるでしょ! 足が速くてモテるのは小学生までよ」

「うつせえ! こちとらそんなの百も承知だ……よ?」

ってあれ?

いや待てよ。俺はこの一瞬の間で すごいことを思いついたのかもしれない。

というか、今までどうして気がつかなかったんだ。そうだ。そうじゃないか。ふははは。

「臼井、ナイスプレイだ。俺は決めたぜ!」

「何よいきなり」

臼井は怪訝そうな目で俺を見る。

「さっそく今から　ぶらっと小学校の校庭を爆走してやるぜ！」

「小学生の女の子にモテるために？」

「つたりめえだ！　濡れたタオルが何枚もらえるか、楽しみだぜ！」

今こそ積年の夢を叶えるときがきた。日本の夜明けぜよ！

「それ、実際には、警察官から『これで頭を冷やしてください』と手錠を渡されそうだね」

「そんなちゃっちい拘束具で俺を止められるもんか。これで……これでついに、俺の時代の到来だぜ」

ちようどこの近所に小学校があるしな。なんとまあ絶好のチャンス。思い立ったが吉日というものだ。

放課後の校庭を無邪気に遊びまわる天使たちに　そうだ、会いに行くっつ。

俺が羽よりも軽い足取りで「ランランラン」とスキップをした。と同時に、どこからともなく、ノスタルジックなメロディーが流れてきた。午後五時を知らせる、あの音楽。

「あれ」と臼井が何かに気がついたようなしぐさを見せた。

「そう言えば、アンタさあ」

「ん？」

「門限はどうなったの？」

「……………あ」

臼井に指摘されるまで、完全に忘れていた。門限は午後五時だ。ただいま絶賛放送中の音楽は 午後五時の合図。今から急いで家に戻っても、門限には間に合わない。つまり、門限を破ってしまっただ、ということだ。

「顔が真っ青になってるけど、大丈夫なの？」

臼井が心配そうに俺の顔をのぞき込む。

……………まあ、しかし、きつと大丈夫だ。高野が何とか弁明してくれるはずだから。うん。大丈夫。最悪、命を取られることはないはず。

「アンタの家、相当スパルタで厳しいんだよね？ 近所でも噂になってるけど」

「いやいや、そうでもない。ちょっと血が出たり、意識を失ったりするくらいのもんだ」

「そんなことされてんの！？ そりゃアンタの人格も破綻するってもんよね」

「おいやめろ。ストレスのあまり若くして頭髪を失った男を見るような目はやめろ」

言っておくが、俺の人格はノーマルだ。一般の中学生のそれと大差はない。

憐憫のまなざしを向ける臼井に対して、いかに九条家が普通であるかを説明しようとした、その瞬間だった。

「あつ！」

聞き覚えのある声が、耳に飛び込んできた。

振り返ると、駄菓子屋で出会った少女がこちらを指さしていた。

「アイスのお兄さんだ！」

少女はランドセルを鳴らして駆け寄ってくるや、ぺこりと頭をさげた。

「こんばんは！」

「やあ、今日も会ったね」

「はい！ 昨日はありがとうございました！ えっと、これ……」

言いながらポケットからうさぎの形をした小銭入れを取り出し、その中から四枚の百円玉をつまんでこちらに差し出した。

「あまったおつりです。それと……アイス、おいしかったです」

一瞬くらつときた。少女の上目使いが反則的にかわいいので、危うく俺は理性を失いかけたが、何とか平静を装いつつおつりを受け取った。

「うん、それならよかった。あと、おつり返してくれてありがとね」

「はい！」

とびきり、もといロリきり（かわいさの最上級を表す言葉）の笑顔で返事をする少女。頭の芯がしびれるほどキュートだ。

「ロリ　高明、この子は？」

「悪意のある呼び名が聞こえたが、まあいい。この子とは、駄菓子屋でな」

俺は一連のできごとを臼井に伝えた。

「そんなことがあったんだ。アンタも中瀬古もなかなかの不幸気質よね」

俺は口にこそ出さなかったが、お前もな、と心の中でつつこんだ。

「ねえ　君」

臼井は少女の前に移動して、すつとしゃがんだ。

「私は臼井幸子。君のお名前は何て言うの？」

「あつ、はい。わたしはマキと言います」

「マキちゃんかー。かわいい名前だね」

「ありがとうございます。お姉さんもかわいいお名前です」

少女　マキちゃんは本当にしっかりした子だ。この齡でお世辞
が言えるとはな。

「あの……」

マキちゃんは臼井に頭をなでられながら、こちらを見た。

「お兄さんのお名前は何と言っんですか？」

「俺は」「トイレットペーパーの芯よね」

まじめに答えようとしたところで、臼井に間違った名前を上書き
されてしまった。

「おいこらどどういう意味だ」

「広辞苑によると、長いものに巻かれるしか能のない、中身がすか
すかな人間のことを指すらしいよ」

「俺が長いものに巻かれたことなんか一度もねえぞ！」

「じゃあ、あれ。長い長い物語の最後になって、まさしくトイレッ
トペーパーの芯のように無残に使い捨てられる主人公のことかな」

「んな物語あるか！」

臼井の発言がイレギュラーにすぎる。石だらけの河原でノックを受けている気分だ。

一方その頃、マキちゃんは「え、え？」と目を白黒させていた。

「トイレットペーパー・ノシンさん？ お兄さんは外人さんなんですか？」

「どっちかと言うと、人外だね」「ちよつとお前黙れ」

話をややこしくするな。ちよつと面白いから許すけど。

「あのね、マキちゃん。俺の名前は」「あつ、お父さんだ！」

俺が改めて自分の名を告げようとしたところで、マキちゃんの興味が別の方向に行ってしまった。……実に無念。

マキちゃんの視線を追うと、スーツ姿の若い男性が遠くに立っていた。こちらを向いて、手を振っている。

「それじゃあ、わたしはお父さんと帰ります」

マキちゃんはそう前置きして、

「幸子さん、さようなら。トイレットペーパー・ノシンさん……グッバイ」

最後まで誤解したまま行ってしまった。

高野 V S 姉

自宅前に立っている電灯が、ちかちかと不規則に点滅している様子を、俺は何となく見つめていた。

コツコツコツコツ。ハイヒールとコンクリートのぶつかる音が近づいてきた。

「あつ、先生。こちらです」

「おっと、ここか。地図を見るのが苦手です。予想以上に遅れてしまった。すまない」

高野は早足で現れるや、地図を持つ手で手刀を切った。どうでもいいが、彼女はいちいち拳動がオッサンっぽい。

「ほう、ここがお前の家か。ずいぶん立派な家だな。というか、どうしてそんな落ち込んだ顔をしてるんだ？ まさか門限を破ったせいで、もうすでに家から放り出されたのか？」

「……いえ、違います」

心配されるほどのことではない。マキちゃんに間違った名前で記憶されたことに落ち込んでいるだけなのである。今日の晩飯はトリカブトの煮付けだったらしいなあ。

「ついさっき到着したばかりなので、家の中には入ってません」

「ついさっきと言っても、もう数十分は経つけどな。」

寒空の下、高野のことをずっと待っていたのだ　　と言うと、まるで恋愛小説のような響きになるが、自宅に入らなかった理由は生命の危機を感じるからだ。別の意味で、心臓がときどきしている。

「そうか。なら、さっそく行くか」

「あつ、ちょっと待ってください」

俺はすたすたと歩きだす高野を制止した。

「ん、どうかしたか？」

「ウチの家族に会う前に、先生に一つだけ忠告しておきます」

「……おいおい、やめてくれ。私はびびりなんだぞ」

高野は言いながら、俺の眼前に手の平をかざした。

「ほら見る。今も手汗が尋常じゃないんだ。あまり私をびびらせないでくれ」

見ると、手の平が汗でじつとりと濡れていた。一見、涼しげな表情をしている彼女だが、内心は穏やかじゃないのか。そういや今朝の対面式でもひどいありさまだったもんな。クールな顔して人一倍緊張してそうなタイプだ。

思い出して　　胃袋をぎゅっとつかまれたような感じがした。

「えっと……びびらせるつもりはなかったのですが、ウチの家族は

全員変わり者なので、そのことだけは事前にお知らせした方がいいかなと」

「ほう、変わり者か」

高野の表情が和らいだ。

「私も知人からそう言われることがよくあるな。お前は変わっているぞ、と。ちなみに聞いてみたいんだが、お前も私のことを変わり者だと思うか？」

「……いえ、外見も内面も普通の女性らしいと思いますよ」

拳動や口調はおっさんみただけだな。それは言わないでおく。

「そうか。見え透いたお世辞とは言え、うれしい」

高野は目を細めて子どもっぽく笑った。

「何度も気を遣わせて悪いな。おかげで交渉も頑張れそうだ。では、行くぞ」

「……はい、お願いします」

高野がインターホンを押した。家の中から、ピンポンと音が聞こえる。

呼び鈴が鳴りやむと同時に、「どうぞ」と声が返ってきた。姉の声だった。

姉は玄関先にいる。きつと俺を待っていた。待ち構えていたのだ。何ために　なんて、怖くて口にできねえよ。

「お邪魔します」

高野が玄関のドアを開くと、その向こうに姉の姿が見えた。姉は仁王立ちのポーズで禍々しいオーラを全身にまとっていた。しかし、高野に目を向けるや、驚きの表情を浮かべて、「へっ？」と間拔けな声を出した。

「私、宮山中学の高野と申します。事前の連絡をせずに押しかけて誠に申し訳ございません」

高野は深々とおじぎしながら、立て続けに言葉を紡いだ。

「本日は急遽、九条さんのご自宅に家庭訪問に参りました」

「……は、はい」

姉はぽかんと口を開けていたが、高野が頭を上げると、すぐに顔を引き締めた。

「えっと……愚弟のために、わざわざご足労下さり誠にありがとうございます」

そして意外にも、慇懃な挨拶を返した。

「しかし非常に申し上げにくいのですが、両親は仕事の都合上、現在自宅にはおりません」

「え……あつ、そ、そうですか」

高野は振り返り、困惑した顔でこちらを見た。おいどうすんだとでも言いたげの様子であるが、さあどうしたらいいんだろうね。俺にもわからない。

思えば気が動転していて注意を払っていなかったが、自宅前の駐車スペースに両親の車はなかった。今日に限って二人とも帰ってくるのが遅いとは、何とまあタイミングの悪い。

しかし、今さらそれはどうしようもなく、ここで簡単に引き下がつてもらっちゃあ困るので、俺はファイティングポーズを作って、高野に頑張れとエールを送った。ここからが勝負だ。

と、そんなことを思っていたら、姉からこんな提案が飛び出した。

「あの、高野先生ですか。せっかくわざわざおいでなされたのですから、私でよければ先生のお時間が許す限りお話をうかがいますよ。その最中に両親が帰ってくれば、そのまま話を両親に引き継げばいいですし、高野先生がお帰りになるまでに両親が現れなければ、私から両親にお話を伝えておきますから」

俺はこのとき、奇妙な違和感を覚えた。

考えてみればおかしいのだ。来週の末に控える漫画大賞の応募締め切りに追われている多忙な姉が、俺にまつわる案件に応じるなんて。姉ににとっては時間の浪費以外の何物でもない。

しかし、なぜだ？ わからない。

「いかがですか？」

「……願ってもないご提案ですが、その」

高野は言いよどんで、またもやこちらを振り返った。そのときだった。

「ねえ、高明もそれがいいと思うでしょ？」

姉は 姉にあるまじき猫なで声を発した。俺は確信した。この後、とんでもないことが起こるだろうと。また同時に、それを回避する術がないことも。

「……はい」と俺は答えた。

弟は、姉の命令には絶対に従わなくてはならない。とんでもない被害をこうむることがわかっていても、やむなくそれを受け入れなければならぬ。背くことは決して許されない。

なんでって？

そう問われると、もはやテンプレートになった答えしか返せない。

察してください。死にたくないんです。もう一度言う。死にたくないんです。

「さあ高野先生、どうぞお上がりください」と、促す姉。

「……ええ。それではお邪魔します」

高野は家に入る間際、こちらを一瞥した。俺はとっさに指で輪を作り、はにかんだ。でも、うまく笑顔を作れた自信はない。

高野に続いて、俺も家の中に入った。玄関の脇に立っている姉を横切る　瞬間だった。

「童貞のくせになかなかいい女を連れてきたじゃない。今日の晩御飯はお赤飯ね」

俺の耳元で、姉がささやいた。

「アンタの血で炊いた」

「……………」

まあ。

お赤飯に使われる小豆と血液に含まれている赤血球はよく似ているから、それもアリかなんて悠長なことを考えている場合じゃない。

俺は何ということしてしまったのか！

目の利益しか見えていなかった。他人の力に頼って門限が遅くなればいいなー、くらいしか思っていなかった。過去を思い起こせば、こうなることは事前にわかっていたじゃないか。

昔から、俺が女の子を家に連れてくると、姉は烈火のごとく怒り狂うのだ。

怒りの理由はその時々によって変化するので、姉がなぜ怒っているのか、本当のところはわからないのだが。

……ともかく、ミスった。

もはや負け犬の遠吠えにしかないが、やはり年上の女性と一緒にいると、どうも調子が狂ってしまう。こんな初歩的なミスをするなんて。

最悪な事態を招いてしまった俺に、はたして『今後』があるのかどうかは定かじゃないが、事は慎重に計画せねばなんと肝に銘じておこう。こんなあやまちは、二度と繰り返してはならない。

「高明、リビングまで先生を案内してあげて」

という姉からの指令が出たので、俺は高野を追い越してリビングに向かった。

リビングに入ると、後ろから姉の声が飛んできた。

「先生、そちらのソファーにお座りください。私はお茶を淹れてきますので、少々お待ちください」

「あっ、お構いなく」

姉の姿がキッチンに消えたところで、俺と高野は並んでソファーに座った。

すると、いきなり高野のひじ鉄が俺の脇をこづいた。

「驚くほどできた姉だな。まあ、変わっていると言えば、変わっているが……」

高野の耳打ちに、俺はどきまぎしつつ、うなずいた。正直、俺も驚きだ。いつ、どこで礼儀作法を習得したのだろうか。

そんなこんなが気になるが、今はどうでもいい。これ以上、姉の逆鱗に触れぬよう細心の注意を払おう。集中だ、集中。心を研ぎすませろ。

「お待たせしました」

御盆に三つの湯のみを乗せて、姉がやってきた。

「粗茶ですが、どうぞ」

言いながら、慣れた手つきでテーブルに並べた後、姉は俺たちの向かいのソファ―に腰を下ろした。

「ありがとうございます。いただきます」

高野の言葉を合図に、俺たちはそれぞれ手元に置かれた湯のみを持ち上げて、熱い緑茶をすすった。

「さて」

真っ先に姉が口を開いた。

「お話をうかがう前に……申し遅れました、私、高明の姉の九条京くじょうきよ」

子と申します。以後、お見知りおきを」

「はい、こちらこそよろしくお願いいたします」

二人は落ち着き払った様子で、頭を下げ合う。

「では、要件をお聞かせ願えますか？」

「かしこまりました」

高野はすうつと息を吸った。

「単刀直入に申し上げます。高明くん、門限について、お話があり、ここにやってまいりました」

「弟の……門限ですか？」

姉の眼球が一瞬、俺の方を向いた。お前、この女に何を言ったとでも考えているに違いない。おおつ、マジで怖い！

「はい。事情は高明くん本人から聞きました。昨夜、彼の門限が午後五時になってしまったと」

「そうですね。家族会議の末、そのような決定が下されましたが……それに関して何かおっしゃりたいことがあるのですか？」

高野は毅然とうなずいた。

「まさしくその通りです。ちなみに京子さんにおうかがいしたいのですが、高明くんの門限が早くなった原因は、昨夜、彼の帰りが遅

かったからですよね？」

「ええ、そうですよ」

「実はその……彼の帰りが遅れたのは、私のせいなんです」

「……なるほど。もっと具体的に教えていただけますか？」

姉の表情がひととき真剣になった。ここからが説得の正念場だ。

高野先生、頼むぞ！

「はい。高明くんと出会ったとき、お恥ずかしながら、私はひどく酔っぱらっていました。明日に控えた初勤務のプレッシャーを紛らわすために、たくさんお酒を飲んだからです。しばらく記憶を失くしてしまつくらい」

高野が照れたように頭をかいた。姉はくすつと笑った。

「居酒屋の帰り道でした。気がついたときには高明くんに介抱されていた。彼には本当に悪いことをしたと思います。彼は『私を介抱していたせい』で帰宅が遅れたのですから」

実際は少し違うけどな。

高野は俺のプライドを守るために、一部の情報を変えてくれている。これで俺が泣かされたことは誰にも伝わらない。俺と高野の二人だけの秘密だ。

……先生、ありがとう。

「そして先ほど申し上げた話の冒頭に戻りますが、本日、私と高明くんは宮山中学校で再会し、会話をする中で、門限が短くなつてしまつた旨を聞きました」

高野は目線を上に向けた。

「そこで私は思い立ちました。これは何としても家族の方に事情を説明して、彼への誤解を払拭しなければ。ということ、こうしてやってきた次第なのです」

「そういう経緯がございましたか」

姉はため息をついた。

「実は昨晚、帰宅が遅れた理由を高明に言及したのです。でも、なぜか高明は何も言わないので、私も両親も困り果てていたのです」

「それはもしかすると……私に気を遣つて……」

「たしかに弟は妙に他人に気を遣うくせがありますからね。それが姉として誇らしい部分でもあるんですけど……それはさておき」

姉はごほんと咳払いした。

「これで事情がはっきりしました。両親に報告すれば、十中八九、門限は通常通りになることでしょう」

「そうですか。それはよかったです。これで高明くん、明日から心置きなく部活動に参加できますね」

「……………はあ」

完全に忘れていたが、部活なるものもあったな。

……まあ、門限を元に戻してくれたし、何度か顔を出すだけならいいか。

「では、一件落着ということで、私はお暇させていただきます。お茶、美味しかったです」

高野がすつと立ち上がり、深々と頭を下げた。

「再三になりますが、ご迷惑をおかけして誠に申し訳ございませんでした。そして今度とも、どうぞよろしくお願い申し上げます」

「こちらこそ、わざわざお越しいただいて感謝しております。今後とも、弟共々よろしくお願いします」

俺は姉の声に合わせて、頭を下げた。

ふう。

高野のおかげですべてうまく行った。これにて一件落着だ。

……なんて幻想は、すぐに打ち碎かれることになる。

「それでは、失礼します」

ぱたんと扉が閉じ、玄関先から高野の姿が消えたとき、姉が無機質な声で、こう言い放ったのだ。

「さて、本当のことを教えてもらいましょうか」

隠し事はすぐばれる

俺は姉の部屋で土下座をしていた。冷やかなフローリングに額を付けて、謝罪の意を体で表現しているのだ。

「ごめんなさいの究極形態　それが日本に古来より伝わる『DO G E Z A』というスタイルだ。

どうだ、みつともないだろう。360°のどの角度から見ても、みつともないだろう。

しかし、これでいいのだ。みつともなくとも、姉の怒りの鉄拳を食らうよりは遥かにマシだ。

「下校の途中、中瀬古くに会ったわ。彼、私に会うなりなんて言っただと思う？」

姉の声が頭上から降り注いでいた。その声は怒りに満ちていて、ときおり震える。

……とてもじゃないが、面を上げられない。

もし姉のツラを拝んだら、俺は恐怖のあまり、「下は洪水、土砂災害、これなーんだ？」状態になってしまう。

ちなみに、「下は洪水、土砂災害、これなーんだ？」の正解は失禁である。スカトロ流星群だと大正解。おわかりかな。

それはさておき。

せめてもの願いとして、これ以上みつともない姿は晒したくないのだ。土下座でお漏らし　これは何式の便器なら対応できるのか。未来の科学者たちに期待したい。

「必死な顔で駆け寄ってきて、『弟さんは生きてますか？』　だつて。一瞬、耳を疑ったわ」

「……すみません」

俺は相槌の代わりに謝罪の言葉を告げる。しかし、姉の小言はとどまるところを知らない。

「もつと話を聞けば何よ。彼は、さっきの女に思いきり蹴飛ばされたりしないじゃない。どうしてあんたは、そんな危険人物を我が家に招き入れてんのよ」

「……すみません」

このとき、訊かれもしないのにわざわざ言い訳を重ねる　という行為は火に油を注ぐようなものだ。ただひたすら機械のように「すみません」をリピートすることに徹するのが、経験上もつとも早く相手の怒りを鎮める怒られ方だ。マジだよ。

「あの女の拳、見た？　あれは、人を殴る訓練をしている武闘家の手よ。まず間違いなく有段者かそれと同様の実力者ね。手合せしなくてもわかるわ、あの女は私よりもかなり強い」

「……すみません」

合気道の有段者（五歳のころからやっている）であるところの姉が言うのだから、高野は相当強いのだろう。

それにしても、高野は姉よりも強いのか。そうか、そうなのか。

……なんて身分が低いんだ、俺は。情けなくて涙が出そうになるぜ。うつつ。

「ところで、高明？」

「はい！？」

俺は思わず素っ頓狂な返事をしてしまった。それもそのはず、姉がいきなり俺を名前で呼んだからだ。

高明　だなんて、ここ数年、姉の口から発せられたことは一度もなかったんじゃないかな。

今日はいったい何が起こってるんだ！　いや、いったい何が起こるんだ！？

「さっさと顔を上げなさい」

「……すみません」

俺は仰せのままに従った。

目の前には、姉がいる。依然として、彼女の全身からは邪悪な闘気が湯気のように湧き出ている。よっに見える。

そんな姉は上品に微笑んで、

「何か隠し事をしているでしょう？　そろそろ本当のことを言いなさい」

と本題を切り出した。

「それと、一つだけ忠告しておくわ。私の質問には正直に答えなさい。さもないと、どうなるか……わかるよね？」

「……はい」

答える数瞬前に、俺は腹を括った。もはやどこにも逃げ道はない。こつなったら真正面から立ち向かうまでだ。

……怖いけど。

「よろしい。じゃあまず最初の質問。昨晚、帰りが遅れた事情を説明しなかったのは、なぜ？」

姉は真っ直ぐに俺を見ながら言った。

「あの女の言ったことが本当なら、『いやー、酔っぱらいの女に絡まれて遅くなったんだよ』とか説明すればよかったじゃない。なのに、高明はそうしなかった。これには何か裏があると思うんだけど、どうなのかしら？」

「……裏と言うほど大げさなものではないけど、あえて隠していた部分は、ある」

「何それ？」

「あのさ……言つのが、恥ずかしかったんだよ」

俺は顔から火が出るような羞恥心を抑えながら言った。

「高野先生が怖くて……泣いてしまったんだ」

「はあ？」

姉は目と口を大きく開けた。俺の言っていることが理解できていない様子だ。くそう、これ以上喋るのは恥ずかしいぜ！

「……えつと、その、中瀬古が蹴り飛ばされたのは知ってるだろ？」

「うん。本人から聞いたからね」

「あいつがぶっ飛ばされて、びびった俺は、動けなくなつて」

「泣いたの？　もしかして、それが　帰りが遅くなった原因？」

俺は無言でうなずいた。

「それで　女に泣かされたのが恥ずかしくて、私たちに事情を説明しなかったの？」

俺はもう一度、うなずいた。

すると、姉は身体を仰け反らせながら、

「ぶははははははははははっ！」

大きな笑い声をぶち上げた。

「何それ小学生かよ！　くだらないわ！　あはははははははっ！」

「……………」

ちくしょう。だから言いたくなかったんだ。

もし昨夜、正直に事情を説明していても、

『女に泣かされるなんて、あんた本当に中学生？！　これだから毛も生えていないホワイトチンチン、世にも珍しいツチノコ野郎は』

みたいなことを言われていたはずだ。さらに、両親からの蔑みの視線も加わっていただろう。

どっちにしろひどい目に遭うんだ、俺は。いつもいつも。

「わかったわ。理由がバカすぎて腑に落ちないけど。ぶくくっ」

姉は目の端を拭っている。

「まあ面白かったから、そういうことにしておいてあげるわ」

「……………うん」

昨夜の件については、これで決着がついたようだ。

姉の逆鱗に触れなかったのは、奇跡としか言いようがないけど……
……ともかく助かった。これにて最大の地雷原は通り過ぎたはず。

まだ最後までわからないけど。

「じゃあ、次の質問よ」

姉はごほんと咳をした。

「さっきあの女が、部活がどうか言っていたけど、それはどういうことかしら？ 高明には、部活とは別に『やるべきこと』があるわよね？」

やるべきこと というのはおそらく。

「……漫画の手伝いのこと？」

「そうよ、わかってるじゃない。けれどあの女が部活への参加を催促したとき、高明はどんな返答をした？」

「えっと、あれは、その場しのぎというか……」

たしかに、そうだ。何の考えもなく、「うん」と答えてしまった。

でも

「本意じゃなかったんだ。話の流れで、なんとなく答えたただだよ」

「本当かしら？」

姉の目つきが鋭くなる。

「本当は……漫画の手伝いがしたくないから、部活に参加するとう名目を作るために、あの女を呼んだんじゃないの？」

「いや、違うよ！」

俺は即座に否定した。姉の推測は間違っている。別に自分から進んで漫画の手伝いをしたいわけじゃないが、姉には早く夢をつかんでほしいんだ。

これは神に誓って、本気でそう思っている。

「……そ、そう。そんな大きな声を出さなくてもいいじゃないのよ」

珍しく姉がうるたえていた。俺も、自分が怒っていることに内心驚いていた。

それにしても。

なるほど、姉が引つかかっていた部分、俺に本当のことを訊き出したかった部分は、それか。

でも、それだけは言わないでよかったな。すごく悲しかった。俺が今までやってきたことを全否定されたような気がしたから。

「わかったわ。でも一応これも確認のために聞いておくけど、別に部活をやりたくてあの女の呼んだわけじゃないのよね？」

「うん。部活は、今となってはどうでもいい」

半年前ならともかく、今は心底どうでもいいのだ。目的は見失った。陸上競技を続ける理由は、どこにもない。

「了解。それじゃあ最後の質問ね」

姉の口調がよりシリアスになった。

「さつさと終わらせるために単刀直入に訊くわ。高明、あの女に惚れたんじ」「ありえない」

姉が言い終えるよりも早く答えてやった。このときの反射神経は世界トップクラスの域に達していたと思う。

なぜなら俺は生粋の年下好きだからだ。未来永劫、年上の女性に惚れることなんかない。

これは決定事項だ。誰が何と言おうと、俺はこの意思を捻じ曲げるつもりはない。断じてだ。

「……………そう。わかった」

姉は目を閉じて何かを考えるようにして、うなずいた。そして、続けざま、

「全部の質問に答えてくれてありがとね」

そう言って、輝かんばかりの笑みを浮かべた。肉親でありながら、その笑顔は魅力的に思えた。

「あつ、そうだ」

姉は突然、ぱんと手を叩いた。

「正直に答えてくれたごほうびとして、門限を戻すよう、お父さんとお母さんを説得してあげるわ」

「……え？ 本当に？」

「本当よ」

マジか！ 姉の言うことなら全部聞くからな、うちの両親は。

いやー、しかしまあよかったよ、門限が戻って。それに、姉からの疑いも晴れたし。

最後にこんな結末を迎えるとはね。これはいやはや結果オーライというやつだ。

オールオッケー。よきかな、よきかな。これでようやく一件落着だな。わっはっはっは！

なんて、思っていたところが俺にもあったのさ。

実は、

「高明。それともう一つ、ごほうびがあるのよ」

ここからが真の恐怖の始まりであることを、

「金輪際、あの女と関わることを止めさせてあげるわ。いいわね？」

このときの俺は、知らなかったのである。

作戦名「にげる」

あれ以来、高野から逃げる生活が続いた。

というのも、姉が言った、あのセリフ

「金輪際、あの女と関わることを止めさせてあげるわ」

あえて言うまでもないが、あのセリフは褒美ではなく、俺に対する命令である。

金輪際、高野には関わるなど。

つまりはそういうことだ。

無論、俺に拒否権はない。何も語らず、感情を殺して、その命に従うまでだ。それが、姉弟の間における絶対のルール。たとえ天地がひっくり返るうとも、それを破ることは許されない。

そして。

命を受けた、翌日。逃亡生活、初日。さっそく第一の試練が訪れた。

朝一番、廊下で高野とエンカウント。

「よお……ごほん。おはよう、九条くん」

高野は周囲の目を気にしてか、不自然におしとやかな口調で言っ

た。

「おはようございます」

「えっと、昨日は」「昨日はお世話になりました。今から急ぎの用があるので、失礼いたします」

「おっ……はい。頑張つてね」

俺は努めて自然に言葉を返し、戸惑いの表情を浮かべる高野を置いて、足早に教室に向かった。

これにて、任務遂行。

しかし、間の悪いことに、この後何度も高野と遭遇してしまう。

たとえば、教室を移動中。

「あつ、九条。昨日は」「おっと！ 黒い悪魔 もとい、ウンコがすぐそこまで迫ってきているので、失礼します！」

あるいは、職員室で。

「九条くん。昨日は」「おっと！ 腸内でぶいぶい言わせてる、ブラックギャングたちを、トイレではこぼこにしてくるので、失礼します！」

あるいは、呼び出しを食らっても。

『三年三組の九条高明くん。至急、職員室まで』『おっと！

ウンコとの激しい口論で、俺は何も聞こえない！　こら、てめえ！
ブリブリブリうるせえんだよ！」

あるいは、校門で。

「おい、九条！　昨日は　」「おつと！　水虫がかゆすぎるので、
ダッシュで帰ります！　さようなら！」

振り返ってみると……我ながらこれは酷い。

やけにウンコの足跡が目立つ。たまに水虫に浮気したりもするけれど、ウンコとのいちやつき具合が尋常ではない。

『九条withウンコ』

あえて言うなれば、肩を寄せ合ってプリクラ取ってるレベル。そして、それを互いの筆箱に張り合ってる感じ。

だが、しかし！　考えてもみてほしい。

先生の呼び止めを断るに足る理由が、ウンコ（生理現象）以外にあり得るだろうか？

小便？　小便でもいいが、それは何度も使えないからダメだろう。水虫と同じ、浮気相手に過ぎない。

腹痛？　そんな女々しい言い訳なんぞ、漢の中の漢である九条高明には使えない。だって、腹痛イコールウンコじゃないか。「腹痛と言えば？」という連想ゲームをさせれば、十人中十人が「ウンコ」と回答するだろう。だから堂々と胸を張って、「ウンコ」と言えば

いいのだ。他人に恥じらいを感じさせてしまうような台詞は、口が裂けても言葉にできない。

そう、とどのつまり、ウンコ以外はあり得ないのだ。今の俺にはウンコ以外に考えられない！

とは言っても、その言い訳も毎日続けられない。当たり前の話だが、二日、三日となれば、さすがに高野でも、いよいよ気づくだろう。

『九条は、お腹の調子が悪いんじゃないくて、頭の具合が悪いんじゃないか？』と。

そう思われるのは、誠に不本意だ。

しかし、だからと言って、他に言い訳の代案があるわけでもないし、諦めて高野と会話を交わすのはもっと不本意だ。場合によっては、俺は姉用のサンドバッグとなるだろう。

まあ、俺と高野が関わっていることが姉本人にバレなきゃ済む話なのだが、いつどこで誰が俺たちの姿を見ていて、姉にチクるとも限らない。中瀬古の例もあるしな。油断は禁物だ。

そうして逃亡生活も三日が過ぎた。

もうそろそろ、ウンコとのエピソードが尽きかけた頃合い。

考え事をしながら廊下を歩いていると、あの男が現れた。

あの男、現る

「よお、九条！　ヘイヘイ元気かい？　ヒュー！」

妙な決めポーズと共に、あの男　中瀬古が現れた。ついでに両指を鳴らしながら。パッチン、パッチン……と、人の気に障る音を奏でて。

「オイオイ、そんなしかめっ面、らしくねえぞ！　ジヨウクちゃんよお！　ヒュー！」

「お前……ひとりアヘン戦争でも始めたのか？」

テンションが異常すぎる。こんなハイな中瀬古を見たのは、何年ぶりだろうか。それにしあって、いつにもまして気持ちが悪い。

「おいおい冗談きついぜ！　お前は『パラパラ』ってなダンスを知らんのか？　ヒュー！」

「……知ってるよ。名探偵少年が、アニメのエンディングで踊ってるやつだろ？」

言いながら思い出した。なるほど、さっきの決めポーズは名探偵少年のあれか。

「にしても、なんでそんなにテンションが高いんだ？」

「テテ、テテテテ、テンションッ！？　いつも通りだろ？　通常運行、出発進行ってなもんよ？　ンン？」

……つぜえ。

「中瀬古。あのさ、いきなりなんだが、一つだけお願いしていいか？」

「おうよ！ ドーンときやがれメーン！ ヒュー！」

「頼むから理科室に置いてある薬品、全部イツキしてくれないか？ そのテンションならイけるだろ？」

「そいつは無理なご相談だね、ベイバー！ そんなことしちゃ、マイハニーに怒られちゃうぜ！ フウー！」

「……あん？ マイハニーだと？」

俺は中瀬古の言葉に違和感を覚えた（まあ、すべての言葉が違和感だらけなわけだが）。と同時に、「マイハニー」という文言から、ある推理を導く。

この異常なまでのテンションの高さ。

イカれた言動。

コナン〓新一。

……もしや！ ……まさか！

「お前……彼女ができたとか……そういうことでもあったのか？」

「よくぞ聞いてくれた。さすがは九条。俺の幼馴染だ」

言いつつ、中瀬古は馴れ馴れしく俺の肩に手をまわして、体を寄せてくる。口調が戻ったのはいいが、今度は別の意味で気持ちが悪い。

「ときに 九条よ」

中瀬古は耳元でささやく。

「高野先生がウチのクラスの副担任だということは、お前も知ってるよな？」

「ああ。それがどうかしたのか？」

「なら、あの人が、前に俺とお前がケンカしてたときに現れた女性だということも、知ってるよな？」

「……ああ。だから何なんだ？ さつさと本題を言え」

まどろっこしい。

「俺はなあ、九条……」

中瀬古はズボンのポケットに両手を入れて、天を見上げた。

「恋をしちまったんだ」

「誰に？」

「高野先生に恋をしたんだ」

ためらうことなく中瀬古は言った。不覚にも、男らしいやつだなと俺は思った。

「禁断の恋だが、あの人にホレちまったのさ」

「……お前の心臓、早送りさせる機能とかないのか？」

「ねーよ。強制的に早死にさせようとすんな」

中瀬古の心臓を、自由自在に操れるリモコンがあればいいのに。

極めて気持ちが悪いくから、できるだけ早く（苦しむところはスロ―にして）死んでほしい。

「しかし……どうでもいいけど、どこがいいんだ？ あんな年増で怖い女の」

「強くて美人でカッコイイ」

まあ、それはわからんこともないが。強さと美人を兼ね備えているのは、同意だ。

「けど……お前、出会いがしらにいきなり暴行されてたじゃねーか。あんなムチャクチャなことされて、それでもホレたつてのか？」

「はああああああああああつ！？」

俺の顔を下から覗き込むようにして、中瀬古は吠えた。

「美人の足蹴りなんか、一生に一度あるかないかのレアイベントだぞ？　しかも、女教師だぞ？　Ｓツ気満載美人女教師のヒール回し蹴り（黒ストッキング）だぞ？　これ以上ないレベルのオプション付きだぞ？　実はあの夜、俺は自らに訪れた幸運を噛みしめて咽び泣いたんだぞ？」

「お前の心臓、停止する機能とかないの？」

「あるけど、死ぬわ」

「ほんの三日、一時停止するだけだから」

「やめる。てか、なんでそんなに俺を早死にさせようとする？」

「そんなの言うまでもねえよ」

俺の気分を害す存在だからだ。

「いや、まあ……九条の言うことも一理ある。あの夜は、たしかに俺も怖いと思った。正直、チビったしな。栄養ドリンク一本分くらいは漏らした」

「お前もか」

ちなみに栄養ドリンクの容量は100mlくらい。

「でもな。昨日、二人っきりで会話をしてみて、気づいたんだ。この人は、俺にとっての……運命の人だと」

「お前、言葉選びが絶妙に気持ち悪いな。運命とか、恋とか、八二一とか」

「すべてのプロ作詞家に謝れ！」

「……いや、お前、なんで作詞家の端くれみたいな顔してんの？」

プロの彼らとお前を同格にするのは失礼だし、お前がすべての作詞家に謝れ。昨日、作詞を始めたやつにも謝れ。

「九条、許せ。俺はこういう経験は初めてだからな。今はまだ自分の気持ちを言い表すための上手い言葉が思いつかねえ。でも、これからの経験を通じて、たくさん覚えていくんだろっな……」

「黙れ五流ポエマー。デビューすることなく、引退しろ」

「ああ。高野先生と結婚したらな」

……まったく。

本当に吐き気を催しそうだ。どうも、『中瀬古と恋バナ』という組み合わせが最悪すぎるみたいだ。混ぜるな危険。未知なる化学反応が起きそうだ。

「これ以上、気持ち悪いこと言うと、またアキレス伸ばすぞ？」

「構わねえ。俺は真剣なんだ。いつかあの人に結婚を前提としたお付き合いを申し込む。OKをもらうまで俺は諦めん」

中瀬古の声色は、まさしく言葉の通りだった。

「そして九条。突然だが、お前に頼みがある。マジの頼みだ」

「……なんだよ」

訊ねると、中瀬古の目つきが鋭くなった。

「俺が高野先生を付き合うために、色々と協力してほしい」

この男の目つきは 本気だ。

「本気で、アヘンを常習している男の目だな」

「だからしてねーよ！ てか、アヘンで例えるのやめろ！ 俺の悪評が広まるだろ！」

何を今さら。大々的に不良やってて、悪評を気にするとかどんな小物だよ。

まあ、実際に小物だけど。アクセサリーとかじゃなく、女子に嫌われる方の小物 فقط。

「だってお前、不平等条約結ばうとするじゃねーか」

「いちいちアヘン戦争に絡めんな！」

いやだって、お前の頭がおかしいんだもの。一連の言動を観察してみるに、どう考えても正気じゃないだろ。まあ、恋煩いの最中に正気なれないのは、ある意味では正常なだけだな。

しかし、こいつの場合は極端すぎる。だから、気持ちが悪いのだ。

「協力つつつても、そんな大したことじゃねえ。だから、まずは用件だけでも聞いてほしいんだ。なんなら見返りも用意する」

中瀬古は、両手を合わせて拝むように言った。

……見返りなあ。期待できそうにないけど、腐れ縁のよしみだ

「わかった。聞いてやるよ」

「じゃあ、言わせてもらおう」

中瀬古は俺の両肩をつかんで、こう言った。

「お前、高野先生を避けてるだろ？ その理由を教えてくれ」

トラブルメーカー

中瀬古のご希望通り、俺は一連の事情を説明した。中瀬古が姉に余計な情報を与えたせいで、こうなってしまったことを強調して。

「なるほど」

中瀬古は顔中に汗をかきながら、ひとつ、うなずいた。

「高野先生は『私のせいかもしれない』って言ってたけど、諸悪の根源は完璧に……俺だな」

「だろ？ もつと言えば、高野と出会うきっかけ、俺とお前のケンカの発端、マキちゃんのアイスを落としたのも、すべてお前が原因だ」

神がかり的なトラブルメーカーだ。神と言っても、貧乏のやつな。

「さすがは宮山中学で一番の不良。最凶。最悪。動くトラブル名産地」

「……お、おい！ やめろ！ やめてくれ！」

中瀬古は両耳を手で押さえて、頭を左右に振り始める。

「ただ生きているだけで他人に迷惑をかける才能だけは認めてやるぜ、中瀬古」

「……やべえ、お前の悪口によって、心臓の鼓動が早まってる！

ドクンドクン言ってる！」

今度は、学生服の左胸の部分をつかみながら、「……うつつ」と苦しんでいる。

ざまあみろ。リモコンなしで死期が早まっていやがる。

「……いや、でもな！ お前の姉さんと喋るまでは、その事情を知らなかったんだし、俺に非はない！ けど、悪いのはやっぱり俺だ！」

「そう。お前は一刻も早く心臓を停止すべき。全身全霊を以て苦しみ抜いてから生命活動を終えるべき。やっぱり理科室のすべての薬品を……」

「飲まねえぞ」

……ちつ。好機だと思ったのに。

「しかし、どうしたらいいんだ……」

中瀬古は腕を組んで険しい顔になった。

「高野先生に『俺なら楽勝で九条を説得できますよ！』と言ってしまった手前、どうにかして、その問題を解決しねえとな」

「まずは今後、お前が姉さんに情報をリークすることを止める。姉さんとは関わるな」

「それは……わかった。けど、俺以外にも、お前の姉さんと繋がっ

てるやつがこの学校にいるだろ？ そいつら全員に口止めしねえと、お前は高野先生と会話できねえよな」

そう。それが大問題なのだ。

携帯電話を所有している姉が、同じく携帯電話を所有しているこの学校の関係者に頼めば、俺と高野の動向を監視してもらうことはたやすい。この学校で、姉と繋がっている人間の顔は、俺が知っているだけでも十人以上はいる。

俺とは違って、やけに顔が広いからな、姉さんは。多分、俺より知り合いが多いはずだ。在校生でもないのに。

「まあ、実際問題、口止めなんかできっこねえよな。九条も俺も、女友達なんてほとんどいないし」

「できたとしても、リスクがでかい。口止めしてた事実が姉さんにバレたらもっとヤバいことになるからな」

「だとすると、やっぱりお前の姉さんを説得するしかないんじゃないか？」

「説得できたらもうやってるわ」

姉に真っ向から口論を挑んで、俺が勝てるわけがない。

「だから中瀬古、姉さんを説得するならお前がやれよ」

「そいつは……無理に決まってるだろ。お前の姉さんは、俺じゃあ手に負えない」

中瀬古は 身内以外で姉の本性を知っているごく少数派の人間だ。ほら、こいつったら昔からトラブルメイカーだからな。とんでもない目に遭ってるんだよ。

「……ひょっとしたら、だけどさ」

中瀬古は苦い顔をして言った。

「お前が本気を出せば、説得できるんじゃないのか？ 昔は、ほら」「んなもん、できるか」

俺は中瀬古の言葉を遮った。昔のことはどうでもいいんだ。過去の恥ずかしい思い出を掘り起こすんじゃないよ。

「まあ、たしかに……中学生にもなって『アレ』をやられたら、さすがの俺も引くわ」

「……ごもつともだが、うるせえよ」

アレがキモいのは、自分がいちばんよくわかってるんだ。もしタイムマシーンがあったら、あの頃の俺を、後ろから鈍器で殴りたいと思ってるくらい。

「でも、このまま高野先生を避け続けるのか？ 彼女を傷付けるのを、俺は黙って見過ごすことはできねえぞ」

「そんなの知ったこっちゃねえよ。大体、諸悪の根源は自分なんだって、さっき認めてたじゃねえか。高野には悪いが……この件については、俺のプライドを最優先にする。最終手段は、絶対に使わな

い」

アレは、俺のプライドを著しく傷つける。と同時に、トラウマ（心的外傷）が再び開いてしまう。

「……ちっ、わかったよ」

言いながらも、中瀬古は不承不承というような表情を浮かべた。

「ただ……このことは高野先生に伝えて」「このことは、高野には伝えるな」

俺は中瀬古の顔を真正面から睨んだ。

「高野が関わって、これ以上、話がこじれるのは面倒だ」

年上の女と関わるのは、もうこりこりだ。やってられない。

「もし伝えたら……お前のアキレスがどうなるか、わかるかな？」

キンコンカンコン。

釘を刺したところで、タイミングよく授業開始のチャイムが鳴った。

「じゃあ」

俺は中瀬古の返事を訊かずに話を切り上げ、教室へと向かった。

小さな安息みつけた

学校では高野から逃げ続ける日々を過ごし、一方で、自宅では姉の漫画の手伝いに追われる日々を過ごしている。休まる暇がないとは、まさに今、この瞬間のことを指すのではないだろうか。

一応これでも今年からは受験生の端くれになったのだが、勉強に集中できる時間は一向に取れていない。授業中も、連日の徹夜で消耗した睡眠時間を確保するべく、机に突っ伏して安眠している。おかげで、各教科の先生からは、腐ったみかんに向けるようなまなざしをちようだいすることしきりである。

元より真面目に勉強をするタイプではないが、将来のために備えておくことの重要性は、アリとキリギリスの童話によって十分に教育されている身だ。このままの状態で受験をすれば、まず間違いない惨憺たる結果が出ることは想像に難くない。小学生でもわかる話だ。

俺は、自分の将来が不安だ。

不安はストレスを生み出す。同じく睡眠不足もストレスを生み出す。

ストレスから逃れるために、現実から逃避する　と、結局、目の問題は解決されず、それがさらなる不安の要素となり、ストレスが生まれる。

俺はこれを『ストレスの悪循環』と呼んでいる。

昔、親父からよく聞かされた話だ。

「問題から逃げるな、立ち向かえ。自分で精一杯やって、それでもダメなら人を頼れ。それでもダメなら、最後は俺が助けてやる」

なんて、やけにカッコイイことも言ってたな。

しかし、そんな威厳のある親父ですら、姉に対しては無力なのである。

ある日、俺は見てしまったのだ。

親父が年頃の娘に反抗されて、「女の問題は、どうもならん。難しい」と母に向かって弱音を吐いているところを。

だから俺が、親父に「姉さんが無理やり俺を漫画のアシスタントにしようとするんだ」と打ち明けようにも、それは文字通り無理な相談というわけだ。いくら頼っても、助けてもらえない。

かくして俺は、ストレスの悪循環にはまってしまっている。それは、決して自力では（他力を使っても）抜け出すことはできず、姉が漫画家としてデビューするまで終わらないだろう。願わくば、今週の選考を通過して欲しいものだが、素人目から見ても、それは難しいように思えた。

今は耐え忍ぶ時期だ。研鑽を重ね、まだまだ粗削りな画力を高めていくことに専念すべきだ。

というような感じで。

眠い頭を働かせ、自らの心境と姉の漫画を分析していた、とある日の授業中。

その授業も残り数分となったところで、俺は睡魔に負けてしまい、無意識の世界へと旅立った。

「最近ずつと寝てるよね」

臼井のあきれたような声によって起こされた。周りの声がうるさいので、今はきつと休み時間だ。俺は机に突っ伏しながら答えた。

「いや、実は後ろの女子のパンツを覗いてるんだよ」

「はあ？ 角度的に無理でしょ」

急な下ネタにも全然引かずに立ち向かってくる臼井は…… 空気が読めねえやつだなと思う。悪いが今だけは、俺のことを気持ち悪がつて、どこかに行つてほしい。誰の妨害も受けずに、ずっと眠っていたいんだ。

「念写ならぬ念夢でパンツを見るといふ境地を開拓しようとしてるんだよ」

「……ちなみに、今日の私のパンツの色は？」

「悪夢は見たくない」

「永眠させてあげようか？」

臼井は明るい声で言った。けど、たぶん顔は怒ってるはずだ。こ

のまま怒って、どこかに行ってくれ。頼むから。

「眠そうなところごめんね。でも、ひとつだけ質問してもいい？」

「……おう」

臼井らしからぬ優しげな声が聞こえたので、思わず返事が遅れてしまった。

「今週の日曜日、陸上の記録会があるんだけど、アンタは出場する？」

「パスで」

今度は即答した。そもそも出場するつもりはなかったが、その日はあいにく漫画の応募締切日なのだ。

「……そっか。わかった」

臼井は　これまた臼井らしからぬ慈悲深さを感じさせる語調で言った。

「アンタが何やってんのかわかんないけど、暇になったら陸上部にも顔出さないよ」

「……ああ。幽霊部員が突然化けて出て、みんなを驚かせてやるよ」

「今の顔色の悪いアンタが言うとりアルすぎて怖いんだけど……ま、無理せずに頑張んなさいね」

ばしんと背中を強く叩かれた後、臼井が離れていく足音が聞こえた。

……空気が読めないやつめ、と思ったのは改めるしかない。

いつの間にやら、ずいぶんと気の利く女性になったんだな。

陸上部主将という立場が臼井を成長させたのか。あるいは、それ以外の要因によるものなのか。わからないが、とにかく、俺をちょっぴり元気にさせてくれてありがとう。

などとは、面と向かっては絶対言えないし、心の中で言うのもどこか恥ずかしいので、何も思わないでおく。

俺はただ、安らかに眠るだけだ。

そう。ストレスに弱く、長時間泣き叫ぶ赤ん坊のように、ひたすらに眠るだけだ。

体罰

白井の思いやりに触れて温かな気持ちを抱いてもなお、それを一瞬で消し去るほどのストレスが、次から次へと生み出されてしまう。

それがストレスの悪循環にはまった俺の現状だ。

ストレスの主な原因は、土日連続での徹夜による睡眠不足。また、漫画のしめきりに追われている緊張感が、俺の脆弱な心を刺激していた。

週明けの月曜日。

俺はとうとう一睡もせずにおぼつかない足取りで登校した。椅子に座るや、さながら失神KOのごとく眠りについてしまった。

授業中、数学教師の栗山武に無理やり起こされ、だらけた態度を注意された。いつもならすぐに自分の非を認め、平謝りでその場を切り抜ける俺だが、その日に限ってはイライラを抑えることができなかった。

「人が眠っているときに……いちいちうるせえな」

「な、なに!？」

「……てめえの数学の授業は、数式との闘いじゃなくて、眠気との闘いなんだよ。不眠症のカウンセラーに転職しろよ」

ぼろりと本音をこぼしてやると、栗山は顔を真っ赤にして俺の胸

倉を掴んだ。

「お前、もういっぺん言ってみるおおおおおっ！」

栗山の絶叫が教室中に響き渡ると、今度は女子たちの悲鳴が上がった。その次の瞬間、机と椅子のガタガタと移動する音が一齐に鳴り、周囲は騒然となる。

だが、俺は周りのことなんか気にしていなかった。

「あん、聞こえねえのか？」

目の前の気に食わないやつに暴言を吐くことしか、考えていなかった。

「つまんねえ授業してんじゃねえよ。この税金泥棒め」

栗山の返事は、右の拳によって繰り出され、俺の頬にぶち当たった。ゆっくりとした動作の右パンチだったが、俺に避けるつもりはなかった。

なぜ避けなかったというのは、ごくごく簡単な話だ。暴力を受けることによって、暴言を吐いた罪を軽減させるためだ。

またさらに、それが俺にとって有利な状況になったりもする。

当たり前の話だが、先に俺が暴言を吐いたからと言って、栗山が俺を殴つてもしょうがない。とはならない。理由が何であれ、教師の体罰は許されないからだ。

いや、違うな。許されるか許されないかは、俺の気持ち次第だ。

俺が許すと言えば、栗山は何らかのペナルティを受けなくて済むし。俺が許さないと言えば、栗山は何らかのペナルティを受ける。

つまり、一度殴られておけば、先生（支配者）と生徒（弱者）の立場は逆転する。

そう、それが俺の狙い。安眠の邪魔をした、栗山への罰。

「言わせておけば……元々、授業を聞く気もないクズのくせに！」

栗山は血走った眼球でこちらを睨みながら、怒鳴った。

……やれやれ。

元々、授業を聞く気がなかったのは正解だが、よりもよって俺をクズ呼ばわりしてきたか。それこそ漫画に出てくるダメ教師しか言わないようなセリフを現実に聞くことになるとはな。

意外と面白いじゃん、この人。ようやく眠気が醒めたよ。

「どうしたんですか栗山先生！？」

出入り口の戸が勢いよく開かれ、体育教師の佐藤が飛び込んできた。

「……くそっ！」

佐藤の姿を見た栗山は、忌々しげな表情をして、俺の胸倉を掴ん

だ手を放した。

俺は頬をおさえるフリをして、口元を手で覆った。にやりとゆがんだ口の形を見られないようにするために。

そうして数学の授業は、六限目の途中にして、中断された。

再現

そんな一悶着があった後、俺は会議室に呼ばれ、栗山を含めた四人の教師と話し合うことになった。そのときにはすでに、俺も栗山も冷静になっていたので、今さら口論するまでの事態にはいたらなかった。

俺が淡々と状況を説明して、栗山の心のこもっていない謝罪を聞いて終了。会議室から出る頃には、帰りのホームルームのあとにある掃除の時間になっていた。

「……さっさと帰るか」

呟いてから、教室を目指して廊下を歩いていると、思わず顔をしかめてしまうような光景を目の当たりにした。

階段の踊り場で、高野と中瀬古が喋っていたのだ。

俺はとっさに踵を返して逃げようとしたが、こちらに気づいた中瀬古がダッシュで追いかけてきた。

「おい！ 九条、待てよ！」

「うつせえ！ こっちくんない！」

望んでもいない鬼ごっこが始まった。あちらこちらで掃除をやっている人がいるので、彼らを避けながら走らなければならない。

誰かとぶつかるのは嫌なので、力をセーブしつつ足を動かす。

「おい、陸上部！ 待てよ！ お願いだから待ってください！」

早くも中瀬古の息遣いは荒くなってきた。

人気の少ないエリアに差し掛かったところで、俺はここで加速して、中瀬古に格の違いを見せつけてやろうかとした。そのとき、中瀬古が叫んだ。

「妹の、写真、やるから！」

「……な、に？」

無意識のうちに俺の足は止まっていた。「妹の写真」という声に止められた。

止まらざるを得なかった。

なぜなら中瀬古の妹は 俺の嫁の第一候補者であり、彼女の写真とあらば、俺は臓器を売ってでも手に入れたい代物だからだ。

「……はあはあ……ようやく止まったな」

肩を上下に動かして息を整えている中瀬古に向かって、俺はさっそく言い放った。

「さて、中瀬古。待ってやったんだから、さっさと写真をよこせ」

「……はあはあ……わかった。……こんなこともあるつかと……用意しておいてよかったぜ」

中瀬古は荒っぽい手つきで胸元から一枚の写真を取りだし、それを人差し指と中指で挟んで投げてきた。

受け取った写真には、たしかに、彼の妹　中瀬古菜月の姿が映されていた。今度は、俺が「はあはあ」する番だ。

小学五年生。黒髪のショート。整った顔立ち。透き通るような白い肌。小柄で細身の体格。性格がやや生意気で、照れ屋なところもポイントが高い。近寄ると、ほのかに柑橘系の香りがする　ような気がする。俺の目の前にいる男が兄貴であるという事実さえデリートできれば、彼女は俺にとって超理想的な女の子になる。

余談になるが　だから俺はいつも中瀬古の心臓のリモコンを探しているんだよ。実はね。

「写真はあるがたくいいただいたが……ところで俺はいつまで待ってりゃいいんだ？」

早く帰って昨日投稿した漫画の反省会をしなきゃならない。ゆえに、こんなところで長々と拘束されるのはごめんだ。

「長々と待たせるつもりはねえが」

中瀬古はすうつと大きく息を吸って、

「お前に聞いておきたいことがあるんだ」

真剣な声色で言った。

中瀬古がマジな顔をしているときは大体ロクな展開にならないんだが、非常に高価な写真をもらった手前、その要求をあつさりと断ることはできない。

「わかったよ」

俺はしぶしぶ要求を呑んだ。

「でも、手短に頼むぞ。俺は忙しいからな」

「……忙しい、な」

中瀬古は含みのある口調で呟いて、「わかった、手短に」と約束した。

「これはついさっき高野先生から聞いたんだけどさ。最近、いろんな教科の教師たちが、口をそろえてお前の授業態度について、グチってるみたいなんだよ。あいつは教師をナメてんのか、と」

「まあ、授業中はずっと寝てるからな」

そりゃ怒って然るべきだろう。言われなくても、自覚している。

「それで高野先生がお前のことを心配してたんだ。家庭で何かあったんじゃないかねえかって」

「……………」

俺は何も言い返せなかった。中瀬古の言ったことが凶星だったからだ。

「俺は正直お前のことなんかどうでもいいんだが、高野先生には協力しようと思っっている」

「……ご苦労なこった」

どうせ無駄な努力なのに　と俺は心の中で呟いた。

「だからな、九条。お前を心配している高野先生に協力したいからお前に確認を取っておく」

「それはさっき聞いたぞ。聞きたいことがあるんだろ？　お前、ボケてんのか？　さっさと本題に入れよ」

軽口を叩いてみるが、中瀬古の表情は依然として変化なし。それどころか、心なしかさっきよりも真剣みが増している。

中瀬古は重々しい口調で、こう言い放った。

「お前の抱えている事情を、高野先生に伝えていいか？」

「前にも言ったが、やめろ」

俺はきっぱり断った。

「もしそれがきっかけで、高野が俺の問題に関わってきたら、それこそ大問題になる。姉さんの怖さはお前もわかってるだろ？」

「まあな」

中瀬古はうなずいた。

「でも、わかってるからこそ、これだけは言える。お前の姉さんに対抗できる人物は 俺の知り合いでは高野先生しかない」

「姉さんに対抗できる人物は……高野しかない？」

「ああ」

中瀬古は自信たっぷりの顔で、もう一度うなずいた。

「この間、俺は高野先生の真の強さを知ったんだよ」

「……お前が高野に蹴られて痛い目に遭った日のことか？」

「いや、それじゃない。お前は知らないエピソードだ。俺と高野先生との二人だけの秘密だから詳細は言えないが 高野先生はとにかく強い。色んな意味で強い。口論も、ケンカもだ」

たしかに高野の実力は計り知れないものがある。言われてみれば、姉も高野の存在を脅威に感じていたしな。だからこそ、姉は「あの女と関わるな」と言ったのだろう。

「だからさ、九条。悪いことは言わねえ。お前の姉さんを説得したけりゃ、高野先生を頼れ。お前の抱えている問題を解決したけりゃ、高野先生を頼れ。逃げず、隠さず、すべて打ち明けちまえよ。あの人なら お前の力になってくれる」

実際に俺も助けられたんだ みたいな、やけに気持ちのこもった声で、中瀬古はそう言った。

「……………」

俺は数秒、思案した。……なるほど、中瀬古の主張はわかった。

「まあ、そうだな」

だから俺は本音で答えてやる。

「きつとお前の提案は正しい。高野は姉さんに対抗できる。それは認めてやる」

「だったら、伝えてもいい」「でもな」

ぱあつと表情を輝かせた中瀬古を制止して、俺は答えを告げた。

「勝率のわからない勝負には賭けられない。失敗したときのリスクがでかすぎるからな」

それに　と前置きして、俺は続けた。

「実際、高野は姉さんの説得に失敗している。失敗の原因はお前によるものだが、その事実是谁にも覆せない」

俺にとっては、それがすべてだ。だから中瀬古の主張する成功例に、全幅の信頼を置くことはできない。

「俺が本当に信頼できるのは、俺が見てきたすべてだ。重要な場面では、自分の見てきたもので判断したいんだ」

言い切って、俺は中瀬古の目を見据えた。これ以上、何も言うことはしない。

「……………」

中瀬古は長い沈黙の後、「……そうか」と言って、納得の意を示した。かと思いきや、

「……これだけ説得してイエスと答えなければ、強硬手段しかねえな。つか、そもそも確認を取る必要なんてなかったんだよね」

とんでもないことを言い始めた。この数分間のやりとりを無駄にすることを示唆した内容だった。

「な、何言ってるの、お前？」

中瀬古得意のつまんねえギャグなのかと思い、俺は訊ねる。

「あ？ 独り言だから気にすんな、お前には関係ねえ」と、中瀬古。平然とした顔つきで答えやがった。

「いやいや関係ないことないだろ」

あえて俺に聞こえるようにふざけたことを抜かしやがって。もしか、強烈なアキレス腱固めがご所望なのか？

「俺が誰に何を言おうが言つまりが、俺の勝手だ。誰にも制限されることあねえ」

「……おい、これ以上ふざけんなよ。中瀬古」

さすがに本気でカチンときたので、俺は脅しの意を含めてこう言
った。

「もう一度痛い目に遭いたくなけりゃ、高野には言うなよ」

「……いいぜ、やってみろよ。もし痛い目に遭わされたら、すぐに
……いや あえて言わなくても、俺の言わんとすることはわかる
よな？」

中瀬古は不敵な笑みを浮かべた。

「教師に殴られてこっそり笑ってるような、お前ならな」

「……くっ！」

俺は歯噛みした。中瀬古の発言は想定外だった。不良の番長であ
るところの中瀬古だけは、自分のメンツを守るために、決して『正
義の力』を借りることはないと思っていた。だから今までは、こい
つよりも肉体的な力が強ければ、こいつには勝てると思っていた。

しかし、ここにきて形勢は逆転した。

「アキレス腱固めでもなんでもいいからやってみろよ！ ケガした
らすぐさま警察に通報してやるぜ！ 何なら思いつきり殴ってみて
もいいぜ！ それこそお前の家族にばれたら大問題になるからな！」

中瀬古は挑発を続けた。正論で俺を攻め立てた。そして、対中瀬
古との戦いにおいて全戦全勝の俺を窮地に追い込んだ。

その結果

「……望むところだ」

俺は自棄になった。何もできずに中瀬古に負けるのだけは嫌だった。せめて

「俺の名を思い出したくなるまで、殴ってやる！」

そう叫んで、強く拳を握りしめた直後だった。

「お前ら、またケンカしてんのか?!」

それはまたしても不意のことで、背後から高野のハスキーな声が響いてきた。

振り向くと、荒く呼吸をする高野が、十メートルほど離れた場所に立っていた。

これは 多少の違いはあれど、まるで高野と初めて出会った場面を再現したかのようにだった。

俺は硬直しかけたが、あのときの二の舞を踏むつもりはなかった。

「……っ！」

自分の意志とは関係なく震え始める両足を制御し、

「あっ！」

と高野が叫ぶ間もなく、俺はその場から全力で逃げ出した。

カバンを教室に置いたまま。

後先考えずに校舎を飛び出し、家に向かったのだった。

反省会の後に

「反省会は、こんなところにしておいて」

昨日完成したばかりの原稿のコピーをクリアファイルに入れながら、姉は言った。

「次回作のネームは、明日から描くわ。いつも通り、私はひとりきりで作業をするから、あんたは自分の部屋で、設定資料とキャラクター原案に目を通しておくこと。私の監視の目がないからって決してサボらないようにね」

「うん。全力を尽くすよ」

部屋のいたるところに落ちているペットボトルや栄養ドリンクを拾い上げながら、俺は答えた。

今さら釘を刺されなくても、サボるつもりは皆無だ。むしろ今の俺は、姉のサポートに並々ならぬ情熱を抱いているくらいなのだ。

いよいよ本格的に受験勉強を始めるためにも、姉には一刻も早く漫画家としての礎を築き、俺に代わるプロのアシスタントを雇えるようになってほしい。もしそれが叶えば、俺は晴れて受験生となり、勉強に集中できる。

目標は、そうだなあ。できれば夏休みまでには、その筋の関係者に認められるよう努力したい。

俺は、他ならぬ俺自身のために頑張るのみだ。姉も、他ならぬ姉

自身のために頑張ってほしい。

心の底から、そう思う。

「さて、明日の打ち合わせも終わったし、ここらで終わりにしまし
ようか。今日もお疲れさま」

姉は椅子から立ち上がり、「……んっ」と両腕を上には伸ばして上
体を弓なりにそらした。

その刹那、姉のお腹が鳴った。まるで弱々しい子犬が鳴くような、
とても情けなく、かわいらしい音だった。

「なんか小腹がすいたわね」

姉は服の上からお腹をさすって、そう呟いた。

時計を見ると、十時を過ぎていた。六時に夕食を取ってから、も
う四時間も経つ。腹が鳴ったりはしないが、俺の胃袋も若干の空腹
を訴えている。

「お菓子のストックはまだあったかしら？」

「前回買ってきたのが五日前だから、母さんに全部食べられてるか
も」

「たしかに。あの人は歩く駄菓子屋だもんね」

姉はやれやれと肩をすくめる。

「ここのご無沙汰だったけど、あんたに夜食を買ってきてもらおうかな。頼まれてくれる？」

「うん、わかった。注文の品は？」

「いつものアイスといつものスナック菓子を五個ずつね　あつ、そうそう。ちょい待ち」

姉は思い出したようにそう言って、金色の長い髪を払った。

「最近あんたも色々頑張ってるし、あれからあの女との妙な噂も聞かないから　今日は、あんたの好きなものをおごってあげるわ」

「……っ！」

思わず俺は息をのんだ。

『あれからあの女との妙な噂も聞かないから』という一言に、ただならぬ違和感を覚えたからだ。

この発言から読み取れる情報はただ一つ。やはり姉は、誰かを通じて俺と高野の行動を監視していたらしいということだ。

警戒しておいてよかったと安堵すると同時に、例の中瀬古の提案に乗せられて高野とコンタクトを取っていたらと思い、背筋が凍りついた。

「それとね。今まで手伝ってくれたお礼と」

狼狽を隠せない俺の心情を知ってか知らずか、姉はマイペースに

言葉を紡いでいく。

「これからよろしくという意味も含めて、これ」

ピンク色の長財布から五千円札を抜き出して、それを俺に手渡した。

「お釣りもあんたのものよ。いつも、ありがとね」

とまあ、そんなこんなで。

姉の毒気のない笑顔に見送られ、俺はパシリの任務をまっとうすべく夜の田舎町へと赴いた。

足で地面をとらえて歩きながらも、足の裏がふわふわと浮ついたような感覚になっている。夜はまだ冷える季節なのに、身体の芯があたたかい。

姉のパシリをやっていて、こんなに気分が高揚したことは今までになかった。この新感覚は、いわゆる下僕（ないしまゾ犬）と呼ばれるアブノーマルな人種の抱く感情……じゃないのか。勘違いであってほしいが、ひょっとすると受け身耐性の変態性欲が俺の心の中で開花し始めているのかもしれない。

「いやいや、ねーよ」

自分で自分にツツコミながら、目的のコンビニに向かう。

「それにしたって、なあ」

俺はそう呟いて、自分の影に視線を落とす。

あれほど上機嫌な姉を見るのは、いつ振りだろうか。俺に容赦のない暴行を加えているときの姉は、それはそれはもう肉親の俺でさえ素敵に見えるほど良い笑顔をしているのだけれど、そういうシチュエーションではなく、ノーマルな場面における素の笑顔。

久しく見ていなかった。俺が小学校低学年の頃には、いつでも見ることができたはずなのに。

いつからだろうか。姉に脅えて暮らすようになったのは。

「いらっしゃいませー」

「……うわっ！」

俺は声を上げて、我に返った。考え事をしていたせいで、コンビニの中に入っていることに気がつかなかった。

視界の端で、男性店員が不思議そうにこちらを見ているが、気にしないでおう。う。

俺は気恥ずかしさを隠すため、早足で店内を歩きまわり、スピーディーに買い物を済ませた。

「ありがとうございましたー」

との声を背に受け、逃げるように店を出た。

すると、ようやく顔の火照りが収まる。

「……ふっ」

一息ついて、再度歩き始めながら、物思いにふける。

次の考え事は、さつきとは違うテーマ。今日の日中のことだ。

目下、俺が懸念している人物は、中瀬古と高野である。今後、彼らの動向によって、夏までに姉を漫画家デビューさせる計画が、台無しになる可能性がある。だから俺はどうにかして彼らの動きを封じたい。

でも、どうやって彼らの動きを封じればいいのか。

中瀬古は暴力によって従わせることができなくなったし、説得できる材料も見当たらない。高野はそもそも接触することすらかなわない。

『俺に関わらないでくれ』

彼らがその言葉を聞き入れてくれるだけで、すべて丸く収まる話なんだが、そう簡単に事が運ぶとも思えない。もともと、これはあくまで俺の憶測に過ぎないが、中瀬古はすでに高野を説得しているはずだ。

『九条姉弟は、いつもああなんですよ。だから心配せずに放っておきましょう。関わるだけムダですよ』

みたいな感じで。これでも長年の付き合いになるしな。あいつは俺のことをよく知っているし、俺もあいつのことはよく知っている。

それに、あいつは今日の会話の最中、こう言っていたからな。

『俺は正直お前のことなんかどうでもいいんだが、高野先生には協力しようと思っている』

この発言から察するに　つまりとところ、あいつは高野の説得に失敗したのだ。なぜ失敗したのか、なぜ高野が説得に応じなかったのかは、当事者たちに聞かなきゃわからないが。

ともかく。

いずれ高野と中瀬古の二人が何らかの形で、俺に関与してくるだろう。そしてその後、高野と接触していた事実が間違っても姉に知れたら　俺は終わりだ。

いやはや。前途は多難である。

どうしたもんかねーなどとあれこれ頭に考えをめぐらせながら歩いていたら時間はあつという間に過ぎた。ここから数メートル先の角を曲がれば、自宅に面した道路に出る。玄関に着くまで、あと一分もかからない。

「ん？」

自宅前にさしかかったところで、バイクにまたがる人のシルエットが見えた。全身黒づくめで、頭にはヘルメットをしている。怪しさ満点の不審者だ。体格は細身で、身長は俺より低い。

俺は足を止めて、次のアクションについて思索した。

あえて不審者に接触してみるか。それとも不審者がここから立ち去るまで待つか。

安全なのは後者だが、いかにも怪しげな人物を、みすみす逃していいものだろうか。……否、だめだろう。文字通り、不安で夜も眠れなくなる。

だとすれば前者を選ぶしかないが、もし不審者が物騒な行動に出ることがあれば、肉弾戦になるのは避けられない。多少の危険が伴う。

バイクに乗っているということは、不審者は少なくとも十八歳以上の人間だが、見た目はそれほど強そうじゃない。きっと俺でも勝てる。

まあ最悪ケンカに負けたとしても、家の外が騒ぎになれば、姉が出てきて退治してくれるはず。あいにく両親は出張で、二人そろって家にはいないが、姉がいれば十分だ。暴漢の一人や二人、合気道の達人の敵ではない。

しかしながら、不審者は俺の家を眺めて、一体何を企んでいるのだろうか。

まずはいきなりグーパンチで質問するようなことはせず、日本語を使ってその意図を問いただしてみるか。

俺は不審者に気づかれないうる警戒しつつ、背後から間合いを詰めた。

「おい」「ッ！」

声をかけると、不審者は機敏な動きで、こちらを向いた。

「俺の家に何か用か？」

さらに、高圧的な口調で問うてみる。さあ、どう出る。不審者さんよお。

「……………」

長い沈黙の末、不審者はこもった声で

「九条か」

俺の名を呼んだ。その声は、聞き覚えのある特徴的な女性の声だった。

「……ひ、ひょっとして、高野……先生ですか？」

まさかの人物の登場に、俺がうろたえながら訊ねるや、不審者は返事の代わりにヘルメットを外して、その顔を見せた。

「よっ、また来ちまつたぞ」

そう言っ、いたずら小僧のような笑みを浮かべた人物は 高野だった。

「どうして……ここに……？」

「……いや、えつと」

高野は照れたように頬を人差し指でかきながら、ここのたまった。

「中瀬古に止められたんだが、どうしてもお前と話がしたくてな」

「……っ！」

俺は一瞬で自分の顔が熱くなるのを感じた。心臓が跳ね上がり、今にも口から飛び出しそうな勢いだ。

「で、家の中にいるかと思ったら、いきなり背後から現れたからびっくりしたぞ……というか、顔が真っ赤になってるみたいだが大丈夫」「大丈夫です！」

俺は喰い気味に答えて、高野の声を遮った。指摘されたら余計に顔が熱くなる。何とかごまかさないと。

「て、てか、びっくりしたのはこちらの台詞ですよ。全身真っ黒のライダーが、自宅の家の前に立ってるから、何事と思い……あ」

心境を吐露しつつ、ふと気づいた。俺は今、姉のいる自宅の真ん前で、高野と接触してしまっている！この上なく最悪なシチュエーションじゃないか！

「今度は顔を青ざめて。一体どうしたんだ？」

言いながら、高野が首をかしげた。そのときだった。

「外で何やってんの？ お客さんなら家に招き入れなさいよ……っ

て、えっ？」

声と同時に玄関が開き、姉がまばゆい光を背にして現れた。大きな目を真ん丸にして。

直後 目の前の世界が、まるでコマ送りのように進んだ。

「逃げるぞ」

高野のささやき声が聞こえた。爆発的なバイクのエンジン音が鳴り響いた。

「京子さん！」

高野が姉の名を叫んだ。俺の体が地面と平行になった。高野の左腕で、お腹をがっちりとホールドされる形で。

「高明くんを、少しだけ借ります！」

ブウンッ！ ブウンブウンッ！ バイクを吹かす音が鳴るたび、コマ送りの世界が加速した。

かくして 俺は拉致された。

高野香奈という、型破りな新米教師の手によって。

そして後に、この行動が、とんでもない騒動の引き金になるだなんて。

このときの俺が思いもしなかった……のではなく、思いもしたく

なかったのは言うまでもない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7849s/>

ぼろり

2012年1月12日21時48分発行